

## 平成24年度 産業技術連携推進会議 ライフサイエンス部会

### 第11回デザイン分科会 議事録

日 時：平成24年6月28日（木）～6月29日（金）

場 所：6月28日／内閣府 沖縄総合事務局 共用会議室D,E（本会議、研究交流会）、  
A,B（研究交流会）

6月29日／《午前の部》■沖縄科学技術大学院大学（OIST）

《午後の部》■株式会社 比嘉酒造 ■壺屋やちむん通り

主 催：産業技術連携推進会議 ライフサイエンス部会 デザイン分科会

独立行政法人 産業技術総合研究所

運 営：沖縄県工業技術センター、沖縄県商工労働部商工振興課、工芸技術支援センター、  
沖縄総合事務局型剤産業部地域経済課

#### 【デザイン分科会 本会議（13:10～17:15）】

（司会進行：沖縄県工業技術センター 生産技術研究班 デザイン担当 亘保 秀一）

##### 1. 開 会

##### 2. 挨拶

#### デザイン分科会会長 榊谷 幹雄（三重県工業研究所）

今年度よりデザイン分科会会長を仰せつかっています三重県工業研究所の榊谷と申します。まずは今回のデザイン分科会、沖縄県で初開催ということで、大変な準備をしていただきました沖縄県工業技術センター所長の比嘉様、ご担当の亘保様をはじめとして、沖縄県関係の皆様には厚く御礼申し上げます。そして今回、経済産業省デザイン室より外山様、特許庁より岡様、山永様にご参加いただきありがとうございます。そして長年、産総研のほうからライフサイエンス部会副会長としてデザイン分科会にご協力いただきました橋本様が所内のご異動ということで、新たに産総研、宮田なつき様にデザイン分科会のご担当としてご支援いただくこととなりました。宮田様よろしくお願ひいたします。

さて、今回の資料を作成する中で過去の記録を見ておりましたら、デザイン分科会は昭和30年代から活動されているということで、今年50歳の私が生まれた頃からの非常に歴史のある会議であります。会議数としても今回はライフサイエンス部会となつてからの11回目ですが、それ以前に工芸部会、製品科学連合部会、物質工学連合部会のなかで85回を数え、それから今回が96回目の開催となり、50年目、100回目の節目がまもなくとなるようです。しかし、歴史ある会だから良いという訳ではなく、デザイン分科会、さらには産技連としての役割、存在が問われている時代でもあります。皆様の所属されている機関としても産技連があるから、デザイン分科会に参加したから、こんな成果があった！というのを期待されていると思います。

最近の分科会では、昨年までに山梨県さんが中心となつて発刊された「こらぼん」という成果もあります。これもさらに発展させ、さらに「こらぼん」に続く成果を期待されていると思います。また今回はデザイン分科会初の試みとして、ポスターセッションを実施します。皆様からはデザイン分科会に参



加してよかった！と感じてもらえるように、そして過去に脱退した機関からは、もう一度再入会したいと言ってもらえるような会にしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

#### **ライフサイエンス部会副会長 宮田なつき（(独)産業技術総合研究所 デジタルヒューマン工学研究センター)**

宮田と申します。よろしくお願いいたします。ライフサイエンス部会副会長で、どこにもデザインと書いてないですが、デザイン分科会の担当ということで橋本さんにかわって、これから皆さんと一緒に活動させていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

今日は自己紹介も兼ねまして、私の所属するデジタルヒューマン工学研究センターの紹介をしたいと思います。デジタルヒューマンというのは、基本的に人間の機能をコンピューター上にモデル化しようという試みです。人間の動きであったり、形であったりといったものを機能と考えているのですけれども、それを計測してデータベースにして、整備しながらモデル化して、それを製品づくりであったり、サービスの設計に役立てていこうということを考えています。

私自身は研究者で、手のことを集中的に研究しております。これで説明するとわかりやすいかと思うのですが、携帯電話の設計をしようと思った時に、最近だったらCADでやると思うのですけれども、CADモデルを与えると、適当にいろんな手が出てきて、勝手に使ってくれて、それが使いやすいとか使いにくいということを判断してくれる。そのようなソフトをつくりたい。この時に最適な判断してくれるためにはいろいろなことをやらなくてはならなくて、その形であったり運動であったりを測り、モデル化し、それで製品を操作できるようにしなくてははいけません。対象がいろいろ違って、靴をつくる方面であったり、歩行モデルを持ってきて健康増進であったり、あとは、こちらはキッズデザインで気になったこともあるかもしれませんが、事故防止のために事故情報を集めてモデル化して、それを次の製品づくりに役立てていく、そういう枠組みをつくっていくというようなことをやっております。

私自身もそうですが、比較的共同研究の多いユニットでして、私自身が関わったものとしては、例えばコクヨさんとマウスをつくっていたり、皆さんとバッティングロボットをつくっていたり。また、日産の方とステアリングスイッチの配置の問題をやっていたりしますが、実際、地方の公的な研究機関との協力も結構やっております、これはほんの一部ですけれども、たまたまこれは両方とも岐阜の方で、木製椅子の設計案件みたいなもので協力をさせていただいております、これは産総研の地域産業活性化支援事業というのがあって、何か月か研究員の方に来ていただいて一緒に研究をするというようなことをやっています。もう1つは、これは今も続いている話ですけれども、広島の方と手袋用の手形をつくるというような話をやっております、これは産総研の枠組みは使わずにA - S T E Pという外部の予算をとって一緒にやっています。

というわけで短いですが、今後ともよろしくお願いいたします。

#### **開催県代表 沖縄県工業技術センター所長 比嘉 眞嗣**

皆さんこんにちは。沖縄の方言でよくいらっしゃいましたというのは「メンソーレ」です。ありがとうございますは「ニフェデービル」と言います。だから「メンソーレ、ニフェデービル」でお迎えしたいと思います。ようこそ沖縄にいらっしゃいました。大いに歓迎いたします。

開催県として一言ご挨拶させていただきます。今回の会場をお世話していただきました総合事務局の皆様、どうもありがとうございました。また、当センターのほうでは、今回司会進行している亘保君ですが、残念ながらデザイン担当は亘保君たった一人で、一番手で奮闘して頑張っております。彼には、「帰れ帰れ」と言っていました、今回の準備等のために毎日残業しておりました。

当センターは、昨年度までは企画部のほうに所属していました。そして今年4月から商工労働部のほうに移りまして、経産といえますか、商工労働関係のほうに戻ってきましたので、これからまた心機一転、センターのほうを引っ張っていききたいと考えております。午後からいろいろお話があると思いますが、デザインに関しては重要だと思っていますので、私の希望としても、ぜひ私のいるときにでも、可能かどうかちょっとわからないですが、1 + αをやっていききたいと考えているところです。また、デザイン技術相談も増えている中で、平成21年度から依頼試験の対応でデザイン調整もやっております。

県内のデザイン業界の動向ですが、県内は食品加工産業が多いために印刷会社、広告代理店などのグラフィック系インハウスデザイナーが大半を占めるような状況ということになっております。独立したデザイナーとしては、デザインプロデュース業が2〜3件、グラフィックデザイナーは多数存在しております。また、アーティスト的要素が強いと言われております。

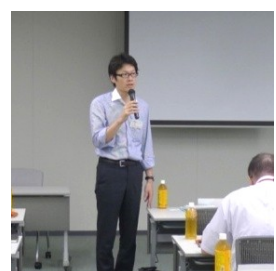
私が今、着ていますのは、かりゆしウェアということで、ここ数年、本土にも結構上陸しまして、沖縄では4月からこれが県庁の制服ということになっております。夏場はネクタイなしでかりゆしウェアが非常に快適ですので、帰られましたら、ぜひ宣伝していただきたいと思っております。

デザイン部門の近年の取り組みとしては、今年まで陶器関連の事業をやっております。デザインに関するものを担当しているのが亘保君であります。今年、沖縄の振興計画であります21世紀ビジョンというのができ上がりました。その中でも感性のものづくり支援と銘打ちまして、沖縄の豊かな感性を活かしたものづくり支援をするための方策も作成されております。沖縄は、日本本土にはない特異な亜熱帯の気候環境です。生活、文化、特に芸術、舞踊など、いろいろあります。それを日頃の生活に活かす中で、我々は生活しております。最近、航空機関係もLCCで非常に安く来ていただけるような環境になっております。遠いところでも4時間もあれば着くようです。皆さんが今回、沖縄に来ていただいたのを機会に、今後も何回でも沖縄に足を運んでいただければいいかなと思っております。

本日の会議が皆様にとりまして、実り多い会議になることをお祈りいたしまして、歓迎の挨拶とさせていただきます。本日は長い会議になると思っておりますけれども、よろしくお祈りいたします。

## **経済産業省 商務情報政策局 クリエイティブ産業課 (デザイン政策室 室長補佐) 外山 雅暁**

初めまして。クリエイティブ産業課デザイン政策室の外山と申します。よろしくお祈りいたします。今回の会議では、中小企業の方を相手に、ものづくり、製品開発や、そのご支援をされている皆様と、プロダクトの中での問題点とか、そういったところについて話し合うことができる会とお聞きしております。私どもとしても、こういった問題点を施策に活かしていくために大変参考になると考えております。今回はお話を伺わせていただくという立場で来ておりますが、夜の交流会も通して、私に直接何か言いたいとか、こういったことができないかという提案があるようでしたら、ぜひお話いただければと考えておりますので、ご提案お待ちしております。



私、デザイン政策室に着任したのが、つい先日の4月で、ちょっと私事なのですが、私自身、大学ではデザインを勉強しておりました。デザインを勉強してきたという人間がデザイン政策室に着任したのは、20年以上ぶりの久しぶりのことらしいです。そういった意味では、ものづくりの立場から政策に落とし込むという感覚では、どちらかというデザイナーの感覚に近いところも持っているかと思っておりますので、ぜひ私をうまく使っていただいて、何かやりたい時があったらご協力させていただければと考えております。今日は活発な意見交換になることを楽しみにしておりますので、何とぞよろしくお願いいたします。

### 3. 議長選出

#### 沖縄県商工振興課工芸技術支援センター 大城 直也

こんにちは。お久しぶりの方と初めましての方がいらっしゃいます。工芸技術支援センターの大城と申します。沖縄県のほうで工芸のデザインの振興と有効活用などに携わって仕事をしております。よろしくお願いたします。では、座って議事のほうを進めさせていただきたいと思います。

議事のほう、1) から4) まででありまして、ちょっと時間は押しておりますが、4時まで私のほうの議事進行で進めさせていただきたいと思います。まず、議事のほうを進めていきます。

### 4. 議 事

#### 1) 連絡事項 (デザイン分科会会長 榊谷 幹雄)

よろしくお願いたします。平成24年度春デザイン分科会資料とある1番、デザイン分科会としての取り組みに関する課題と書いてある冊子、こちらのほうをお開きいただけますでしょうか。先ほど少し申し上げましたけれども、デザイン分科会としての取り組み、研究成果普及とかビジネスマッチング、外部競争的資金獲得等につなげる取り組み、これがデザイン分科会の中で



の成果としてつながっていけば一番いいと言われておりますので、こういったものを実際にどのぐらいできるかというところが一番大きな課題だと考えております。その中で「こらぼん」のような、これは具体的に成功事例として産技連の中でも報告されたとお聞きしております。こういった成功事例を創出する分科会としての取り組みが必要であるかと思っております。

それから、以前、2年間分科会長をしていただいていた北海道の及川さんのほうで、細則に関してはいろいろと整備していただいたわけで、この中に少し載っていますけれども、それに伴って、いろいろ見ていく中で不十分なところもありました。不十分なところは何かと申しますと、今までブロック幹事というのが各地方のブロック別にあったわけなんですけれども、誰がブロック幹事をしていくのかというのがいま一つはっきりしなかったというのがありまして、特に私の属する東海・北陸ブロック、あるいは近畿のほうではいつもしっかりブロック幹事さんを毎年のように決められて、運営されて、また、九州のほうでも、先ほどお聞きしたんですけれども、あと、広島が今回、中国・四国も今までなかなかはっきりしなかったということで、ブロック別の活動も、活動することはないにしても、そういうことをしっかりしていこうという思いもありまして、今回、各ブロックのほうに確認しまして、この2年間、どなたが幹事をしていくかということをはっきりしていこうということで名前を載せさせていただきました。そういったことも含めて、今年度の課題だと思っています。

あと、デザイン分科会独自のウェブサイトの再利用、これは滋賀の野上さんのほうでいつもつくっていただいていますメーリングリストのほうもそうですね。これの活用に関してもなかなかされていないというのが現状ですので、こういったことの活用ということも考えていきたいと思っています。それから研究交流会、そして「こらぼん」の展開といったことが、特に今年度の課題だと考えております。

続きまして、次期デザイン分科会の開催予定として、これも輪番制となっているんですけど、今年度秋に関しては神奈川県、昨年もしてもらったじゃないかという話もあるんですけど、昨年の開催予定だった東京のほうで、移設等々でなかなか設備が整わなかったこともありまして、東京の施設だけお借りして、神奈川の堀さんに開催の事務はさせていただきました。今年度、茨城にお願いしていたんですが、茨城には現在、ご担当者がいない状況だということで、今年度秋に関しては、もう一度神奈川、小堀さ

ん、守谷さんのほうにお願いするということで話がつきまして、昨年に引き続きですけれども、神奈川県で研究成果発表会をしていこうと考えています。

来年度の春（夏）は北海道・東北ブロックの担当になるわけなんですけれども、今度は岩手県さんのほうに内諾いただいております。また、後ほどご挨拶いただきたいと思います。

それ以降ですけれども、これは確認がとれているわけではないんですが、平成25年度の秋の研究成果発表会は埼玉県、そして2年後、平成26年度春、これは東海・北陸ブロック、岐阜県の順番、輪番になるということになっています。それから、私の次のデザイン分科会長、1年半後ですけれども、近畿ブロックからということで、近畿ブロックの方はよろしく願いいたします。

そこに4番として、分科会運営要領第6条関連とありますけれども、このブロック順というのも決まっているわけですが、このブロックの中でもなかなかご担当の方が見えないと。あるいはデザイン分科会には登録していないというようなことを言われるところも多いですので、そういうところは黒括弧になっていますけれども、かなりブロックによって差が出てきている現状はありますが、またよろしく願いいたします。先ほど申しましたように、今脱退している県、あるいは担当のところももう1回復活していただけるような、そういう分科会でありたいなと思っています。

次の頁、今年度の分科会役員ということで書いてあります。私は来年度まで、それから亘保さんのほうは、一応規約、要領、細則によりますと、副会長ということで、平成24年、この春の総会まで副会長となります。小堀様のほうが今年度秋の研究発表会まで副会長。また、この春が終わったところから岩手県の小林様のほうに1年間、副会長ということでお願いします。それから、先ほど申しましたブロック幹事のほう、北海道・東北ブロックは北海道工業試験場の及川さん、それから広域関東のほうは神奈川県の小堀さん、東海・北陸ブロックのほうは私、榎谷、それから近畿ブロックのほうは京都市産業技術研究所の岡村さん、それから中国・四国ブロックのほうは、昨日、メーリングリストのほうに出ましたので、広島県立総合技術研究所の橋本さん、それから九州・沖縄ブロックのほうは、佐賀県工業技術センターの川口さん、また、よろしく願いします。

この後からすぐにあります研究交流会は、ものづくりのほうは佐賀県工業技術総合センターの野上さん、それからユニバーサルデザインのほうは佐賀県工業技術センターの川口さん、地域デザイン振興のほうは広島市産業振興センターの寺戸さん。幹事のほうよろしく願いいたします。

私からの連絡事項は以上です。もう1回確認していただくために、この細則、要領に従って運営しているということをご確認いただくためにも、この運営要領、細則をつけておきましたので、ごらんください。一番最後の頁に、過去からの分科会の開催県一覧というのを載せてあります。これを見ていただくと、次の順番がどこに来るかというのがわかるかと思っておりますので、ごらんくださいませ。

**議長：（沖縄県商工振興課工芸技術支援センター 大城 直也）**

ありがとうございます。ただいま事務局のほうから事務連絡、配付しました資料のほうで、デザイン分科会としての取り組みに関する課題について、それぞれを念頭に置いていただきつつ、ポスターセッションと研究交流会のほうにつなげていただきたいと思います。

## 2) ポスターセッション見学（各研究交流会会場へ移動）



### 3) 研究交流会

#### ものづくりデザイン研究会（共用会議室A）

	機関名	所属セクション	氏名
1	(公財) 広島市産業振興センター	技術振興部 デザイン開発室	寺戸 毅 (幹事)
2	特許庁	総務部 普及支援課	岡 英範
3	特許庁	総務部 普及支援課	山永 滋
4	北海道立総合研究機構 工業試験場	製品技術部デザイン・人間情報グループ	日高 青志
5	山形県工業技術センター	置賜試験場 特産技術部	羽生田 光雄
6	千葉県産業支援技術研究所	生産技術室	岡村 成将
7	神奈川県産業技術センター	技術支援推進部 商品開発支援室	小堀 誠
8	神奈川県産業技術センター	技術支援推進部 商品開発支援室	守谷 貴絵
9	静岡市商工部地域産業課	地場産業担当	頭師 雅之
10	三重県工業研究所	窯業研究室 伊賀分室	榊谷 幹雄
11	滋賀県工業技術総合センター	信楽窯業技術試験場	川澄 一司
12	(地独) 鳥取県産業技術センター	産業デザイン課	亀崎 高志
13	(地独) 山口県産業技術センター	企業支援部 デザイングループ	野村 祥子
14	宮崎県工業技術センター	企画・デザイン部	川添 康正
15	沖縄県商工労働部商工振興課	工芸技術支援センター	大城 直也
16	沖縄県商工労働部商工振興課	工芸技術支援センター	仲間 大三

#### ユニバーサルデザイン研究会（共用会議室D, E 本会議会場）

	機関名	所属セクション	氏名
1	佐賀県工業技術センター	研究企画課	川口 比呂志 (幹事)
2	産業技術総合研究所	デジタルヒューマン工学研究センター	宮田 なつき
3	(社) 人間生活工学研究センター		畠中 順子
4	岩手県工業技術センター	企画支援部	小林 正信
5	静岡県工業技術研究所	ユニバーサルデザイン科	多々良 哲也
6	大阪府産業デザインセンター	商業・サービス産業課	川本 誓文
7	徳島県立工業技術センター	生活科学課	中瀬 博幸

#### 地域デザイン研究会（共用会議室B）

	機関名	所属セクション	氏名
1	滋賀県工業技術総合センター	機械電子担当	野上 雅彦 (幹事)
2	産業技術総合研究所 関西センター	関西産学官連携センター	濱崎 浩
3	内閣府 沖縄総合事務局	経済産業部 地域経済課	田端 弘樹
4	北海道立総合研究機構 工業試験場	製品技術部デザイン・人間情報グループ	万城目 聡
5	(地独) 青森県産業技術センター 弘前地域研究所	生活技術部	舘山 大
6	岩手県工業技術センター	企画支援部	長嶋 宏之
7	山梨県工業技術センター	デザイン技術部	串田賢一
8	京都府中小企業技術センター	企画連携課 情報・デザイン担当	加悦 秀樹
9	大分県産業科学技術センター	製品開発支援担当	吉岡 誠司
10	沖縄県工業技術センター	生産技術班	亘保 秀一
11	沖縄県工業技術センター	生産技術班	赤嶺 公一
12	沖縄県商工労働部	工業振興班 デザイン施策担当	大城 翔子



□地域デザイン研究会



□ものづくりデザイン研究会

#### 4) 全体会議

##### 各研究会の報告と全体討議

議長：(沖縄県工芸技術支援センター 大城 直也)

皆さん、よろしいでしょうか。研究交流会お疲れ様でした。次の議事に入りたいと思います。全体会議ということで、各研究会の報告と全体の討議に移ります。

まず、ものづくりデザイン研究会のほうから報告のほうをお願いいたします。

##### ■ものづくりデザイン研究会 幹事 野上 雅彦 (滋賀県工業技術総合センター)

それでは、ものづくりデザイン研究会から報告させていただきます。参加各機関から活動状況等の報告をしていただきました。その中から共通のキーワードを幾つか抽出させていただきます。

まず、つくるほうの支援としましては、デザインのプロデュース事業的なもの、また、研修です。研修の内容としては、今までコンピューター系が多かったと思うんですけども、今はもっとマネジメント的なものであったり、または、デザインに関するガイドブックみたいなものも配付されているようなところ、また、感性というキーワードを使った商品開発であったり、価値の評価システムであったり、そういったものの報告がありました。



もう1つのくくりとしては、売っていくための支援としての取り組みが増えてきているような印象がありました。その中ではグッドデザイン賞をとっていくような取り組みの支援、あとはブランド化への支援、そういったものが多かったと思います。それ以外に、医工連携への取り組み事例も多くの県からありました。

最後に、ものづくり研究会としては、ラピッドプロトタイピング装置についての情報交換、少し掘り下げて行いました。各機関のほうで導入されている装置の方式やメーカーについての情報を交換しまして、光造形のメーカーでいうと、Objetまたは3Dシステムズ、それと、ストラタシスの熱溶解方式、この2つが非常にシェアが高かったかなと思います。以上です。

##### ●議長 大城 直也 (沖縄県工振興課工芸技術支援センター)

ありがとうございます。今、ご報告の中で医工連携とかいう単語が出てきましたが。

##### ●野上 雅彦 (滋賀県工業技術総合センター)

医工連携。医学、医療と工業という。

##### ●議長 大城 直也 (沖縄県工振興課工芸技術支援センター)

医学と工業の連携ですね。確認でした。ありがとうございます。

続きまして、ユニバーサルデザイン研究会、お願いします。

### ■ユニバーサルデザイン研究会 幹事 川口 比呂志 (佐賀県工業技術センター)

ユニバーサルデザイン研究会の川口です。私どものほうは今日、初めてポスターセッションということでさせていただいて、そのポスターの前で自分の取り組みを紹介していただきました。

それで、岩手県さんのほうからは、病院の先生1人1人のニーズに応えるオーダーのピンセットのお話をさせていただきました。

あと、千葉県さんのほうからは、高齢の方は普通の椅子だと高すぎるとい  
うことで、クッションで前が3ミリぐらいで後ろが20ミリぐらいのクッション、それを重ねることで、普通の椅子でも背の低いお年寄りでも座りやすくなるとか、そのクッションと組み合わせて、靴の底の厚みが違うくつですか、足の形にも合わせられるように組み合わせて、普通の市販の椅子に腰かけやすいようにということで、商品化を目指して頑張っているというお話をいただきました。

それから静岡県さんのほうからは、こども病院とメーカー、それから静岡県工業技術研究所と一緒に組んで、乳幼児の文房具の開発をしたというお話を中心にお話をさせていただきました。

それから大阪府さんのほうからは、こどもOSということで、子供の動きからそのキーワードを抽出して、それを最終的には、製品開発において安全・安心のために活用するとか、あるいは遊び心のある感性からの商品を、そういうものに展開していくと。そのためのツールの開発をしていますよというお話をさせていただきました。

佐賀県のほうからは、体の不自由な子供たちを動く電動台車みたいなものに乗せて、自分で動けるようにするという研究の話をさせていただきました。

そして、HQLさんのほうからは、人に優しいものづくりにおける人体寸法・形状データの活用ということで、実際に企業さんがこういうふうにご利用されていますよというお話をさせていただきました。

それから、今日はポスター、皆さん、先ほど写真をバチバチ撮られていたので、できたら本当は配れるんだったら、最初に配ったほうがいいかもしれないと思いました。

それから来年度のユニバーサルデザイン研究会の幹事は、これまで私が長年やっているもので、静岡県の多々良さんをお願いしましたところ、お引き受け下さいましたので、よろしくをお願いします。

### ●議長 大城 直也 (沖縄県工振興課工芸技術支援センター)

引き続き、地域デザイン研究会、お願いします。

### ■地域デザイン研究会 幹事 寺戸 毅 (広島市産業振興センター)

地域デザイン研究会の寺戸です。毎回、参加される人数が一番多くて、まとめるのに苦労するんですけど、まず、進化とか変化とかそういうことをキーワードにそれぞれの現状で考えて、お題に従って発表していただきました。その中でいろいろ出てきたんですが、地域産業の地盤沈下とか、伝統工芸もそうですね。地盤沈下とかがあって、生き残るためにどうすればいいのかということで、最終的には公設試験場、デザイナーもそうですけれども、今までと同じ

ことをやっていたらだめだと。結局、デザインという形とか色とか、そういうことだけではなくて、デザインというものを問題解決のための総合的な手段と考えると、その色とか形だけの指導ではなくて、総合的なものであるというふうに考えれば、経営者にも説明しやすいということで、そういう考え方に進





化していかなければならないのだろうという話になったと思います。

いろいろ例があったんですけれども、やっぱり公設試験場が今まで、私としましては経済産業省にあって、技術ばかり教えていると。儲かるための技術みたいなのところがあったと思うんですけれども、その儲かるための技術ではなくて、儲かるための総合的なプロデュースといいますか、デザイナーにもそういうふうになってもらうようなところまで踏み込んだ、ビジネスモデルまで踏み込んだ提案というのが必要になってくるのではないかと。そういう進化というのが必要ではないかという意見になったと思います。

#### ●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

以上で研究交流会のほうの報告を終わりました。

従来、各県の事例、個々の取り組みについて情報を共有するということで、今回、地域のほうで進化という内容、それについて議論しようという、かなり果敢な取り組みでしたけれど、やっぱり時間がなかなか難しくそこに行きつけないというようなものもありましたので、懇親会等の時などにその辺も含めて、せっかく同じデザインの専門家の集まりなので、もっと深めて、掘り下げていけたらいいなというところ です。

よろしいでしょうか。続けてまいります。

その次、提案・要望事項ということで、山梨県のほうから「こらぼん」への追加編集についてという提案・要望がございますので、それについて山梨県さんのほうから説明をいただきたいと思います。

#### **提案・要望事項**

##### ●串田 賢一（山梨県工業技術センター）※「こらぼん」の取組について

山梨県の串田でございます。お時間を少しいただきたいと思います。

配付させていただいた冊子を冒頭で紹介させていただきました。こちらが「こらぼん」という冊子でございます。今日、初めてごらんになる方、あるいは初めてお聞きになる方も、もしかしたらいらっしゃるだろうということで、簡単に概略を説明させていただきます。お手元に資料も配らせていただきましたが、平成20年以前からこのデザイン分科会、何か新しい取り組み、何か求心力のある取り組みをしたいよねということで、ずっと悶々していた時代があったかと思うわけですが、そんな中で平成21年度にたまたま山梨で当番県が回ってきた折に、北海道の及川前々分科会長さんに相談させていただく中で、新しい取り組みをぜひ21年度でやりたいんだよねという話で、いろいろ考えた結論がこの「こらぼん」というものでございます。



改めて言うまでもないんですが、年に2回、春と秋、せっかくこれだけ多彩な人材、各地域の現場を知っている方が集まるという、アドバンテージというんですか、これを何とか活かしてできるといういいねということで、各県の現場のネタ、あるいはその紹介したい技術やノウハウ、人、それから現場の担当だからこそ知っている情報であったり、そういうものを持ち寄って、情報を蓄積したらということで着想したものでございます。

とりあえず、集めてどうするのか、活かし先は当時あまり考えていまして、基本的には各試験場担当者同士の気軽なコミュニケーションのネタになれば、あわよくば産地間連携をした中でコラボレーション商品みたいなものが出るきっかけになればということで、名前はコラボと小冊子で本にするということで、「こらぼん」という安直な名前がついているわけです。発案してアナウンスしてから編集して発行までに時間がかかったんですけれども、その経過はお配りした資料に書いてございますが、当初、

集まりが悪くてなかなか苦労したんですけども、平成23年度の秋に東京開催の折に配らせていただいたというのが現状でございます。

その後、広島県さんで横山さんが人間工学会の折に配付していただいたり、レポートがあったりだとか、最近では日本大学さんの全学部を対象にしたデザイン講義の中で、このデザイン分科会の取り組みということでご紹介を受ける際の資料提供ということでデータ提供をしたりとか、じわりじわりという出てきているという状況です。

本当でしたらこれでチャンチャンでいいんですけども、今後もうちょっと発展的な取り組みをということで、2月でしたか、小堀さんと遠くから榊谷さん、それから前任の産総研の橋本さんが山梨のほうにわざわざ来ていただきまして、みんなでいろいろ飲みながら話して、もうちょっと発展的な取り組みをしていきたいなということで、今日、皆さんにお願いをということで代表してしゃべらせていただいております。これから何をやるにしても、やっぱりまだ集まりとすると半数以下という、デザイン分科会のメンバーは半数以下ということだと思いますので、できればもうちょっと数、参加都道府県さんをまとめて、もうちょっとボリュームあるものとしてまとめて、もう一度チャレンジして、ある程度完成形に近づけて、今回、編集を継続して、できた暁にまた皆さんと今後の展開を考えるということには是非していきたいと思っております。今日、継続した編集について互選をいたしますので、ぜひご承認いただければと思っております。

基本的には編集の方針は変わっておりませんので、各地域に存在している産業ですとか伝統工芸ですとか、ものづくりの技術とか素材、人などの中から、特にこの分科会で紹介したいと考えるような情報をお寄せいただきたいと思っております。これにつきましては、どこに出しても恥ずかしくないような有名なA級の情報でなくても一向に構わないと思っております。むしろB級ネタのほうが集めておもしろいのではないかと考えていますので、出したら恥ずかしいとかそういうことではなくて、ぜひ各地の情報をお寄せいただければ、きっといい情報ソースができるのではないかと考えています。進め方の案ですけども、以前は言い出しっぺということもあって、まとめるまでは何とか我が県でと思っていたわけですけども、今回、編集委員会的なものを設けて、地域も離れておりますので、メールですとかフェイスブックとか、そういうものの利用で意見交換とか、紙面でも編集方針等、みんなで話し合いながらぜひ発行に向けて取り組みを進めていきたい。今のところはこれも案ですけども、7月から8月の間で、おおむねの今後の活用方針を決めまして、おおむねの企画を立てて、8月から9月の中旬ぐらいまでをめどに原稿募集をいたしまして、秋の分科会には何とかひな形を出すような、サンプルとしてお見せできるようにスケジュールを進めたいと思っております。編集にもし参加していただけるのであれば、その方々との話し合いの中で決めることですけども、一応、今の段階ではこのようなスケジュールを進めたいというように考えております。ぜひご協議の上、ご賛同いただけますようによろしく願いいたします。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

ありがとうございます。ただいま山梨県のほうから「こらぼん」についての募集、編集について、こういう形で進めていきますというようなこと、ご提案がありました。それは皆さんもご了解いただけますかということで、よろしいでしょうか。（拍手） ありがとうございます。小堀さん、どうぞ。

●小堀 誠（神奈川県産業技術センター）

串田さんといろいろ試行錯誤をしてきたパートナーとして一言。私の思いつきなんですけれども、全国の公設試の、例えば地場を知っている力というんですか、それをうまく活用する手法の1つとして、過去に、たぶん各地域でも多産地連携みたいなことをやっていた事例があるのかなと思うんです。ちな

みに工芸所ですと、瀬戸の陶器と浦賀の製品とか、燕三条の製品とか、あとは東京のガラスとか、岩手の鋳物等もやりました。そういう作品が倉庫にお宝自体眠っていて、日の目を見ていないようなものが結構あるんですよ。ですから今ならまだ使えるのではないかと。過去にあった事例がもしあれば、そんなものも紹介する欄があってもいいかなと。例えばみたいなこと。だからそこら辺もちょっと頭に入れておきながら、もう一度、自分のところの試験場に戻って、過去にやった取り組みみたいなもので、皆さんに今やったらまたおもしろいんじゃないかなというのがあったら、情報提供していただきたいなと思います。



●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

ありがとうございます。どうぞ。

●デザイン分科会会長 榎谷 幹雄（三重県工業研究所）

私のほうから1つ。この「こらぼん」に関しましては、以前、産総研の橋本さんのほうからもいろいろ引き継ぎがありまして、まず、「こらぼん」をつくってどうするんだ」というような話もどこかからあるとは思っています。これは何のためにつくるんだと。それは今、串田さんとか小堀さんにもお話していただいたとおりになんですけれども、もう1つ、私の思っているのは、公設研究機関と地域の産業との、そのコラボレーションも当然あると思ひまして、地域の公設研究機関がどんな役に立っているのか、そういうことをほかの機関に対してアピールしていくという意味があると思ひます。そういう中で、産技連の中で「こらぼん」というのは成功事例として認められているんだというお話も聞きましたので、そういう産技連の中でのデザイン分科会の位置付けとして、これを確固たるものにしていくためにも、これはいい取り組みではないかと考えております。橋本さんのほうで昨年度末に、これの第2冊をつくってもらいました。300部ほど刷ってもらって、橋本さんのほうに人間工学会のほうで配ってもらった分を差っ引いてもまだ相当部数ありまして、これをあとどこに配付するかというようなことも議論されていますので、もしも皆様方のほうで、この「こらぼん」に関して活用できる、配付できるという先がありましたら、ぜひご連絡ください。私のほうでも、串田さんのほうでもいいんですけども、また、橋本さんのほうにご連絡しまして配付をお願いしようとも思っています。以上です。

●外山 雅暁（経済産業省）

すみません、繰り返しになるんですが、意見とご提案させていただきたいなと思ひて、これは非常にいい取り組みだなと思ひて、ある意味、これら載っている商品というのは、皆様の成果としての成功事例だと思うんです。それで今、私、地域のほうの分会にも出させていただいたんですけども、その中でやっぱり話はあったように、経営者の方たちにデザインというものが理解してもらえないという話もあるので、こういったものを見せていただくと、こういった商品をつくることによって成功していますよという事例になるのかなと思ひています。

あと、その地域のほうの話でもあったんですけども、今回、「こらぼん」という名前でも冊子をつくっているんで、やっぱりコレボレートをしたデザイナーですとか、コーディネーターとかの名前というのをどんどん載せていっていただけるといいのかなと考えているんですね。デザイナーってその商品はつくるだけですけども、結構、表に名前が出てこなくて、例えば中小企業の方がデザイナーを使いたいんだけど、誰に頼めばいいかわからないということもあると思うので、そういったコレボレートにつながるような仕掛けというのをこの中に入れていただくとさらによくなるのではないかと思ひます。

もう一点、デザインというものが外形の形状の変化だけということでは考えていらっしゃる方も多いと思ひますが、そうではなくて、この中にも工業製品的なペンチであったりとか、ルーターリフトの写真

なんかの事例も入っているんですけども、経営者の方がこれはデザインじゃないだろうと思っているような幅広い製品というのをに入れていただけると、さらにいいかなと考えています。意見として聞いていただければうれしく思います。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

ありがとうございます。分科会長に伺いたいと思います。これはテキストは出される皆さんのほうで書かれていますか。それとも事務局、編集のほうである程度整えるのか、今のご意見ですと、結構テキストの説明のところが重要なところがあるので、その辺の作業をどういう感じでされていますか。

●串田 賢一（山梨県工業技術センター）

基本的には情報をお出しいただける皆様のほうにお願いしております。写真は後からでも結構です。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

もう1つだけ、配付先ということだったんですけども、実際、残っている部数と、リクエストをして、大体10部とか20部単位とか、出せるようなロットというか、その辺は大体どのくらいを目安にすればよろしいですか。

●デザイン分科会会長 榎谷 幹雄（三重県工業研究所）

300部出せるわけですけども、これは先にたくさん出して足りなくなっても困りますので、一定期限を決めて、ここにいる方以外にもメーリングリストのほうで、ご要望のところは何部必要かというのを回しまして、その上で配付リストをつくろうかと思っておりますので、これに関してはメーリングリストのほうに流させていただきます。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

よろしいでしょうか。「こらぼん」に関して、ほかに何かご質問がございましたらお願いいたします。ないようですので、次に進めさせていただきます。

セミナー講演会など各県の取り組みについての情報交換、鳥取県からの、よろしくをお願いいたします。

●亀崎 高志（鳥取県産業技術センター）※セミナー・講演会など各県の取組についての情報交換

鳥取県産業技術センターの亀崎です。今回、お願いしたいのが、セミナーや講演会など、これまでにやられている活動について教えていただきたいと思っております。鳥取という地方の県にとっては、そういった成果を出している人の話とかが直に聞ける機会というのがなかなかないので、そういった機会が年に何回かあるというのは、それはそれでとても大切なことだと思っております、そういった情報について教えていただくとありがたいかなと思っております。



それで、単にデザイナーの話だけではなくて、マーケティングも何もわからないような経営者に向けて話をしていただけるような方だとか、買い付けに来られるようなバイヤーの方だとか、それと一緒にやられているデザイナーといった方について情報がほしいと思っております、もしかしたら私が知らないだけで、そういう情報を交換する仕組みがあるのかもしれないなと思っております。んですけども、ちょっとよくわからなかったんで、そういった情報交換の仕組みとかがあれば教えていただきたいと思って、この場でお話しさせていただきました。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

ありがとうございます。鳥取県さんのほうでそういうセミナーとか講演会みたいなものを事業立てして、それで企画するというのが年に何回かあるんですか。

●亀崎 高志（鳥取県産業技術センター）

毎年、産業振興機構という部門とで協力して、毎年開催する予算もちゃんとついているんですけども、まだ私もよくわからない部分が多くて、どういった人が全国で活動されているのかというのもまだわからない部分も多いものでして、そういった情報交換とか、教えてもらえる何か仕組みがほしいなど思っているところです。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

そういうときは、まさにこの会議、ネットワークを活用していただくということが答えかなと、私の主観として思っていて、実は最近も木工のほうの講習会を企画していて、神奈川県の小堀さんのほうに電話を入れて、「こういう趣旨で、こういう対象の人でこういう目的でやりたいんだけど、どなたかいい人を見繕ってよ」みたいなことをずうずうしくも電話をして、それでアドバイスをもらうということを私は既にやっていますし、例えばウェブで、高名な方か、本当にこの人やってくれそうだなというのを、ご自身の感性というか感覚で探した人が例えば鳥取県に住んでいたら、鳥取県にもいたみたいな感じで連絡をとっても、皆さん快く対応してくれるんじゃないかと思うんですけども、迷惑とかないですよ。大体そんな感じですよ、そうでもない？

●小堀 誠（神奈川県産業技術センター）

実際、「こらぼん」もそうなんですけれども、この辺のノウハウとか情報というのがこの集りの一番の財産なんです。今おっしゃったように、参加したよねだけの組織ではないので、本当はそういう情報交流で、ここだけの話みたいなのが結構あるじゃないですか、デザイナーさんだったり、いろんな、そういう裏情報みたいなものを持っていると非常に有意義になると思います。そういうのを集めるということも考えるといいかもしれない。

●司会 亘保 秀一（沖縄県工業技術センター）

九州のデザイン連携の中で1度そういう話が出ていましたが、取りまとめはどちらのほうでされたのでしたっけ。九州のほうで各種デザインのセミナー講師ですとか、その話で何かないですか。

●吉岡 誠司（大分県産業科学技術センター）

大分県です。九州ブロックでデザイン担当者会議というものを十数年やってきました。平成24年、本年度からは川口さんを分科会長として、ライフサイエンス部会から、今まで食品が多かったのが、デザイン分科会という1本立てを今年から、今年の総会に承認されております。



その九州デザイン担当者会議の中で講師リストいうのを出そうということで、成功事例とかのテーマと講師、できれば写真も入れたかったんですけども、それはちょっとまずいよねということで、テーマと講師のリストを九州ブロックという形で出しています。基本的に、最初そういう情報というのは大体産デ振に頼んでいたら、産デ振がいろいろ岩手でいい例があるよとかいってやってくれていたんですけども、最近、産デ振もそういう地方のほうに目を向けていないので情報を得られるかどうかわかりませんが…

あと、中小企業大学校、1カ月研修とかありますので、そこの先生を唾つけて、うちだったらクルーの馬場さんとか河合さんとか、そのあたり、中小企業大学校の謝金とかも教えてもらって情報を収集しています。以上です。

●デザイン分科会会長 榎谷 幹雄（三重県工業研究所）

1つは、ぜひメーリングリストのほうもご活用いただけるとありがたいなと思っています。毎回、各地でいろんな講演会とか、セミナーとか開催されていると思うんですけども、その募集対象ではないかもしれませんが、こんな先生を呼んでこんなセミナーとしますというのをポロッと出していた

だいても、これは出す分には問題ないと思いますので、開催が決まった時点でそれぞれ出していただく  
といいかと思ひます。こここのところ、ちょっとメーリングリストの活用が少ないかなと思ひて、昔とい  
うか、7、8年前はすごく活発だった頃があったと思ひうんですけれども、そんなやり方もあるかと思  
ひています。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

ありがとうございます。鳥取県さん、大丈夫ですか。補足で何かもう一声聞いておきたいことがあり  
ますか。

●亀崎 高志（鳥取県産業技術センター）

講師の方が来たいんだという時もあるんですけれども、一度話を実際に聞いてみて、“この人ならば”  
というふうを選びたい場合もありまして。そういったときに例えば大阪でこういうセミナー、講師を呼  
んでいきますよみたいな話が1カ月前に情報として入ってくれば、ちょっと行ってみようかなと思ひて、  
実際に話を聞いて本当に頼もうかどうかというふうに決められるので、もしよろしかったらそういった  
形で情報をメーリングリストとかで教えてもらえたらとても助かります。

●川本 誓文（大阪府産業デザインセンター）

うちの産業デザインセンターでは、デザイン関係のメールマガジンというのを月2回発行しておりま  
して、うち主催のそういうデザインセミナー等も配信していますので、事前に情報を知りたいという場  
合、直接電話、メール等で問い合わせさせていただくのももちろんですけれども、メールマガジンに登録し  
て、自動的にそういう情報を大阪府と言わず、各機関いろいろなメールマガジンとか出しておられると  
思ひるので、そういうのも利用されるということではいかがでしょうか。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

ありがとうございます。今、工技センターのほうに聞きましたところ、九州のほうでもそういった取  
りまとめのリスト化の取り組みをされているということで、その辺は大分県さんのほうに鳥取県さんの  
ほうからそのあたり質問をいただいて、対応いただくことはできますか。

●吉岡 誠司（大分県産業科学技術センター）

わかりました。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

ありがとうございます。サクッと進めてまいります。

次期開催県、次年度開催県の紹介と挨拶に入ります。まず、次期開催県は神奈川県さんですので、マ  
イクのほうをお願いします。

●守谷 貴絵（神奈川県産業技術センター）※次期開催県挨拶

次期、秋に開催県となりました神奈川県産業技術センターの守谷です。小堀さんにかわりまして、正  
規の職員になりましたので、開催の内容について小堀さんから指導を受けながら進めさせていただきた  
いんですが、開催時期と開催場所について、毎年秋の大会は東京近辺でやるのが皆さん、利用しやすい  
のではないかなというような話がありまして、神奈川県産業支援センターはちょっと不便なところにあり  
ますので、場所をお台場の産総研さんをお借りしてやるか、東京都さんでやるか、どうしても神奈川に  
行きたいんだ、になるのか。ちょっと皆さんのご意見をいただきたいなと思ひているんですが、いかが  
でしょうか。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

今、ご意見をいただきたいということなので。

●小堀 誠（神奈川県産業技術センター）

もし、海老名で、海老名って神奈川の真ん中辺なんですよ。そこでやる場合でしたら、11月8日というのはものづくり交流会というのがありまして、県内の中小企業さんがいっぱい集まって、デザイン関連の県の支援機関の講座で集まったフォーラムみたいなのを考えているんですよ。そこに全国の方が来てくれると、企業さんも参加できるし、非常にいいかなと思うんですが、近すぎますよね、11月8日だと。いつも12月の前半ぐらいが多いんですよ。それで、ビッグサイトあたりで展示会をやっている時期に合わせてやらせていただいているケースも多いので、時期的にはモーターショーか福祉機器展ぐらいの時期、これに合わせてどうですか、東京の…。産総研さんをお借りするか、東京都さんの会場をお借りするかは別として、12月の頭ぐらいで、一応ここにいる方の意見を尊重したいかなと。優先的に。

●川口 比呂志（佐賀県工業技術センター）

11月8日のほうが…。

●小堀 誠（神奈川県産業技術センター）

いいですか、海老名に来ます？建物は立派ですけども不便ですよ。あと、デザインという分野では、何も機械がありません。人はいますけれども、コンピューター1台ぐらいあって、ラピッドプロトタイプング装置等々とかそういうのも光造形も何もないという、それだけで支援をしているということなんですけれども。技術系の機械が少し、いいのがありますから。どうでしょう、やだよという人が多分、言えなくて困っている…。川口さんは行きたいって言うけれども、どうしましょう。

●守谷 貴絵（神奈川県産業技術センター）

東京都と神奈川で候補を挙げて。

●小堀 誠（神奈川県産業技術センター）

じゃあ、メーリングリストを十分に活用していただいて、まず案を2、3決めて、それであれば一つと発信して、多いところに決めます？

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

ちなみに、この場で挙手してもらったらいかがですか。海老名がいい人っていうのを。

●小堀 誠（神奈川県産業技術センター）

11月8日に神奈川の海老名に行きたいという人がいたらちょっと手を挙げて。結構いるじゃない。半分ぐらい？

できれば12月の上旬にビックサイトで何か面白いことをやっている時にそこら辺で行きたいなという方？遠慮しているんじゃないかな？

ちょっと所内で検討してみますが、本当に海老名に来ていただけますか？

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

では海老名、11月8日あたりを基本に、メーリングリストのほうでその辺はご意向を伺ってということでよろしいですか。

●小堀 誠（神奈川県産業技術センター）

一応、研究発表会が主体なんですけど、県内の企業さんとかデザイン支援団体さんとか、そういう方も参加して、聞かせていただいているんですよ。そういう条件で100人ぐらいは最低集めたいなと思ってはいるんですけども、このメンバー以外にね。そんな感じでやりたいと思いますので、ぜひよろしくお願ひいたします。

●議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）

ありがとうございます。神奈川様、よろしくお願ひいたします。

次、進めます。

次年度開催県、岩手県さん、よろしくお願いいたします。

●**小林 正信（岩手県工業技術センター）※次年度開催県挨拶**

岩手県工業技術センターの小林です。よろしくお願いいたします。

まず、昨年の大震災からもう1年ちょっと経ちますけれども、全国、各県の皆さんからの、未だになんですけれども、継続していろいろご支援いただいております。大変ありがとうございます。この場をかりてお礼を申し上げます。ちょうど次回の、来年の話をいただいていたのが震災前後のあたりだったと記憶しているんですけれども、当時のうちの理事長のほうが、実は来年、岩手の技術センターと、あと前身の機関も含めて、創立140周年になるんですね。ぜひその140周年の記念事業の1つとして、岩手でのこのデザイン分科会の開催もやろうじゃないかという話でした。その言っていた理事長も異動でいなくなってしまって、来年度の140周年の記念事業自体が今、かなりなさそうな雰囲気なんですけれども、デザイン分科会に関しては、できるだけ岩手らしい内容で、皆さん、情報交換ももちろんなんですけど、いろいろ楽しんでいただけるようにできればなと思っております。今日は榎谷さんからいただいた資料を見ても、昭和52年ということで、僕もその当時、岩手にはおりませんでしたけれども、35年ぶりということになりますので、なかなかこういう機会でもないと思える機会もそれほどないと思えますので、ぜひご参加いただきたいと思えます。

交通の便にしても、花巻空港というのがありまして、福岡、名古屋、大阪あたりから飛んでいます。新幹線も東京から2時間半はかからないぐらいで盛岡まで着くと思えますので、割と近いのではないかと思います。

今年は沖縄で、結構この時期にしては本当に夏、初夏というか、そういう気候の中での開催になりますけれども、恐らく来年、岩手でやるときは、もちろん梅雨のさなかなんですけれども、雨はほとんど降らないので、ただ、夜は結構寒いんです。また、日本列島の広さというか、今年、来年、参加していただけると、そういうところも普段、なかなか、普段って言っても1年後なのであれですけれども、また違った形になると思えます。

開催の内容に関しては、今の時点では全く決まっておきませんが、これはその都度、榎谷さん、何かの形で出して決めますか。

●**デザイン分科会会長 榎谷 幹雄（三重県工業研究所）**

そうですね。

●**小林 正信（岩手県工業技術センター）**

今後、打ち合わせをしながら詰めていきたいと思えますので、ご希望があれば、こういう分科会の場を通じてご意見いただければと思えます。ぜひお土産代も今からいっぱい貯めていただいて、岩手に来て、いろいろお土産もたくさんありますので、いっぱいお土産買って帰っていただきたいと思えますので、よろしくお願いいたします。

●**議長 大城 直也（沖縄県工振興課工芸技術支援センター）**

次期開催について紹介と挨拶をいただきまして、その他どうしてもということで、何かご発言がある方ありましたら挙手をお願いいたします。大丈夫ですか。

それでは全体会議、議事のほう4つ終了いたしました。では、議事のほうを終了させていただきます。進行にご協力いただきありがとうございました。

●**司会 亘保 秀一（沖縄県工業技術センター）**

議事進行お疲れ様でした。それでは、そのまま事例紹介のほうにいきたいと思えます。最初は特許庁



から、知財総合支援窓口の概要とデザイン・意匠専門家派遣のスキームについてということにより詳しく  
願います。

## 5. 事例発表会

### 1) 知財総合支援窓口の概要とデザイン・意匠専門家派遣のスキームについて

#### ●岡 英範(特許庁 総務部 普及支援課 企画班長)

皆さん、初めまして。特許庁普及支援課の岡と申します。今回、デザイン分科会に参加させていただいた趣旨は、今、工技センターの方々等、中小企業等も日々いろいろな取り組みをされているというような事例とか、そういったところにおいて様々な問題点とか、その中で何か我々の持っている知財の関係でお役に立てることがないかな、というところを考えておりまして、参加をさせていただいた次第でございます。



我々、特許庁のほうから、ひとつご紹介という形で今回お時間を取らせていただいたのですが、我々のほうで中小企業の知財の取り組みというものは、まだ、なかなか浸透していないというような状況でございます。そういった中で、中小企業は全国で420万社あるという現実がありますが、その中小企業の出願というのは本当にごくわずかというのが現状でございます。やはりそういった中で、中小企業の人たちに知財の意識を持ってもらうというのは、今日の分科会の中でも話のあった、経営者の方々とかに意識を持ってもらう、あるいは外部の方から申請に関する技術の話をしてもらうとかですね。何かそういった転機の部分をつくらないとだめなのではないかというところを考えておりまして、我々のほうの事業として今回、知財総合支援窓口というものをつくってございます。

お手元に資料等があるので、そちらのほうをご覧くださいいただければと思うのですが、中小企業側の知財に関係する問題ですね。特許の問題、それから実用新案の問題、それから商標の問題、それから意匠の問題。まさにここはデザインの関係と関わってくるところだと思うのですが、そういったところの問題をワンストップで解決するような知財総合支援窓口というのを47都道府県全部に配置をしてございます。そこで、今回のキーワードになっている経営の観点から知財にどう関係したほうがいいのかというような専門的なスタッフを配置して、そこから弁理士とか弁護士、それから今、関係しているデザイナーさんとかですね、そういった形のものを通して、何か解決をしていって、将来的には知財をとっていただくようなスキームを考えてございます。

去年の実績で申し上げますと、昨年度、約述べ件数でございますけれども10万件ぐらいの相談件数を受けてございます。新規の中小企業の方々も1,000件ぐらいきているというような状況でございまして、我々は待ち受け型という形でいままでいろいろな事業を展開していったわけなんですけれども、これからは企業のほうも含めた新規の相談者開拓とか、そういった部分をやっていきたいというふうなことでございます。その支援窓口というのはどこに設置するかというところで、皆さんにも関係しているところ、県の中小企業支援センターとかですね、工業技術センター等の支援機関とか、それから都道府県の発明推進協議会とかですね、そういったところに事務局を置いてやってございます。そこでいろいろな支援体制をやっています。

今後、その取り組みとしては海外展開とか外部とのマッチングとか、それから適切な支援人材、特許をつくるに当たって、どういう形でその出願の書類を作った方がいいかわからないので弁理士を紹介してくれとか、この窓口を通じて弁理士を紹介するとか、そういった形をやるということでございます。あと詳細な意匠の管理については担当の山永のほうからご説明します。

## ●山永 滋（特許庁 総務部 普及支援課 意匠計画係）

意匠計画係の山永と申します。以前、昨年秋のお台場のときにも少しお邪魔させていただいて、意匠制の説明というときで、その時は最後に少し、今回のような特許庁として知財の面からデザインですとか意匠とかに何か関わることができないかというようなことを検討している、というところをお伝えしていたのですが、改めてそれが実行に移りまして。それと皆様は最もデザインの現場の近くでいろいろと活動されているということで、情報提供と、あとまたぜひこのスキームを活用していただければということで、ご説明に上がりました。

先ほど岡のほうからも紹介がありました、こちらのパンフレットの中を開いていただきますと、真ん中に知財総合支援窓口と書いてございます。ここには窓口を知財専門、主に特許が専門の窓口担当者がいます。皆さんは同じセンター内にいらっしゃるということがあって、もしかしたら既にそのあたりのことはご存じの方も多いかもしれませんが、その窓口の担当者というのは、やはりどちらかというの特許が専門の者になりますので、意匠ですとか、そもそも先ほど掘り起こしという、待ち受けから掘り起こしということがありましたけれども、どうしても技術的な要素についての相談が多いのですが、そうではなくて、この内容であればデザインを活用するともっとうまく収益につながるとか、事業化できるとかというようなものがあつたときに、専門家として適切な支援人材の活用と、その窓口を外付けで専門家を派遣するということが可能になっております。そこにデザインコンサルタント、それから意匠活用ノウハウを有する弁理士など、こういった弁理士も特許とか商標は割と取られている方が多いのですが、意匠ができると、やはり東京とか大阪とかかなり限られたところではできるとするのは結局、ある程度制度をきちんと把握していて、製品をそのまま出願して、そのまま権利を取りますというだけではなくて、部分意匠ですとか、関連意匠ですとか、そういった制度がありますので、そういったところでうまく企業にとって役立つような形で権利化ができるかですね、あと、侵害が発生したりとか、そういうトラブルのところもあるとは思いますが、そういった専門家を派遣できるということになっております。

ちょっと小さな文字になってしまうのですが、こちらの4枚のパワーポイントを1枚にまとめた資料のほうに、概要としてありますがちょっと細かいので一部説明を端折りますが、2ページ目、真ん中に人がいて、デザイン意匠活用支援評価策スキームと書いてあるものがありますが、ここが概要を記してあるページになっております。どういうことかと言いますと、非常に仕組みとしては単純でして、中小企業の方は知財総合支援窓口にご相談にきますと、その窓口で、これはデザイン・ネタであったりとか、意匠候補のより戦略的なところに役に立つようになっていること等がありましたら、窓口のほうから、これはちなみに事業者としては東京の発明推進協会というところが事務局になってやっている委託の事業なのでありますが、そちらの事業者には専門家の派遣が依頼されます。そうしますと、発明推進協会のほうでデザインに関する専門家をプールして、リスト化しておりますので、そういった方を各地の窓口へ派遣すると。そうするとそこで中小企業の方に対して支援をすることができると、そういうスキームになっております。

先ほどからデザインと意匠という言葉を意識的に使い分けているのですが、それが次の3ページ目のところに現れておりまして、今回、楢円が2つあります。あれは特許庁じゃないのという話がありまして、特許庁という、こちらから言うと右側の弁理士さん、そういう専門家の派遣というのはあるだろうということなのですが、やはりもう少し川上のほうからいろいろと支援が必要なのではないかということで、左側のAのところ、ちょっと言い方として今デザイン企画支援チームというふうになっているのですが、こちらのほうがいわゆるデザイナーの方であったりとか、コーディネーター的

な方、コンサルタント的な方というのを想定しております。

4枚目のところの下に青い矢印があって、その中で最初のほうからいろいろなタイミングできちっと支援をしていっているというところを考えて想定しております。派遣フローというのはこういう形で2つのAチームとBチームのリストというのを我々がここで確保して、現在、鋭意作成中というところなのですけれども、どちらかという皆さんは当然そのデザインの専門家ですので、デザイナーを使うということがどれほどあるのかというのは私も以前、そういうケースもデザイナーを個人的に知っている方を紹介して一緒にやってもらうとかというケースも当然あるとは思いますが、何かしらこういうケースに使えるときはご紹介という、ご活用いただければというのと、やはり扱ったものを出版して権利化して事業において外に出ていくんだしということになれば、その時点で意匠が必要なので、ちょっと復習というか、わかりにくいところもありますので、そこは専門家を呼んで企業の相談に乗ってもらうというような使い方ができるかと思っておりますので、その点、ぜひこのスキーム、今年からで私もちょっとバタバタしながら準備をしているところではあるのですがすけれども、ぜひお役立ていただければと思っております。

最後に1点お願いというかですね、まさにデザイナーのほうは皆さん得意分野というか、我々もいろいろとあたってはいるのですがすけれども、特に中小企業の地場もということになると、なかなかできそうな方がいらっしやらないというか、東京で大きいものやっぺいらっしやるといふ方が多いので、結果的に今日の夜とか、交流会とかに出させていただきますので、例えばこういう人とかというのが思い浮かぶことがあれば、我々のほうへご紹介いただければ、その方にコンタクトをしてみるということも可能だと思っておりますので、ぜひそういった方がいらっしやればご紹介いただければと思っております。質問などがありましたらお願いいたします。

#### ●島中 順子 (HQL)

きっと皆さん、この相談会等をするのにかかる費用のことをものすごく心配されていらっしやると思っているので、費用がかかるかどうかということ。

#### ●山永 滋 (特許庁 総務部 普及支援課)

すみません、肝心な話が抜けていました。費用は無料です。無料ですが、よく資料を読んでいただくと、口頭で説明すればいい話なんですけれども、結局、デザイン料とか願書作成とかそういったところは持てないという、相談としての派遣と、入り口…マッチングというか…お見合いという形で、先ほど亀崎さんからもありましたけれども、最初のきっかけとか、地域でなかなか専門家がいないかということをもそもも前提でやっておりますので、そこに誰かいい人がいないか、こういう要件なんだけれどもということ窓口のほうに投げさせていただくと、費用としてはかかりませんが、ある程度相談のレベルまでしか対応は…そこまでということも逆にあります。

#### ●座長 宮田 なつき (産業技術総合研究所)

ほかに何かご質問ございませんか。その他、なぜか座長をすることになりましたので、すみません…こっそり入れ替わっていましたがすけれども。

すみません、私が質問してもいいんですよね？これはウェブに情報が載っているんですか。

#### ●山永 滋 (特許庁 総務部 普及支援課)

載っています。

#### ●座長 宮田 なつき (産業技術総合研究所)

なるほど。この冊子はどこかで配られたんですか。どのぐらいどこに、どのぐらいの情報があるのかなという。

●山永 滋（特許庁 総務部 普及支援課）

今、つくったばかりで、特許庁のほうから各関係機関のほうには配付の手続をとっております。沖縄総合事務局のほうの特許室のほうに聞いていただければと思いますし、あるいは特許庁のほうからでもその部分は、ちょっと部数のほうは制限があるかもしれませんが、配布して頂けるようであればそこは対応したいと思います。

●座長 宮田 なつき（産業技術総合研究所）

そこが窓口になっているのですか。

●岡 英範（特許庁 総務部 普及支援課 企画班長）

はい。

●座長 宮田 なつき（産業技術総合研究所）

不明な事があれば今のうちに聞いておいたほうが良いと思いますが、大丈夫ですか。大丈夫でしたら、こちらでちょっと時間も押していますので。ありがとうございました。

（拍手）

●座長 宮田 なつき（産業技術総合研究所）

では、次の事例発表に移ります。2番目は研究開発から製造販売までということで、徳島県の中瀬様、よろしくお願ひします。

**2) 研究開発から製造販売まで**

●中瀬 博幸（徳島県立工業技術センター 生活科学科長・専門研究員）

徳島の中瀬です。よろしくお願ひします。先ほど神奈川でという話がありましたけれども、私の場合はどうしても地方圏の場合は年に2回以上というのは非常に難しいので、むしろ、そういう発表ができるのであればということで今回応募して加えさせていただきました。ここで発表したいのは、いわゆる通常の研究発表ということではなくて、むしろ、例えば徳島のような地方圏の場合はデザインという言葉、何しろデザイン開発という言葉が、私たちがやっている本来のデザイン開発ではなくて、単なる表の部分だけ、それこそお絵描きごっこみたいなものをデザインとしてとらえられているケースが多いので、その誤解を解いて私の本来やっているデザインというのがどういうものかというのを皆さんのほうにも、一緒に考えていただければと思います。今回のお願ひしました。



まずですね、これは一応6分割していますけれども、一番最初に上の右側ですね。基礎研究と応用研究という、ベースになる研究があって、その次に発想・発案・企画・設計があって、その次にモデル開発とか試作開発がありますが、普通ですね、よくデザインとくくられている表面だけのデザインというのは、この発想・発案・企画・設計、場合によったら単なる発想・発案の部分だけをデザインととらえられているケースというのが徳島のような地方の場合には結構あるんですよ。さらに、もう少しそれが進んで仮に基礎研究から、ここで言うモデル開発、試作開発ですね。この円の右半分、そこまででデザイン開発は終わりだというふうにとらえられているケース。これも非常に多いんですがね。だけど、本来、その試作開発ができていれば、今度メーカーが物をつくって、実際に流通のほうに広げようとする。この製品開発、それから販路開拓、そういう部分までメーカー側としては進めなければいけないわけですね。さらに、その次の段階ですね。商品開発とか販路開拓とか、これは実際に販売をするメーカーさんというか、販売企業がこの分野に入っていくわけですね。それである程度販売実績ができれば、その

次に市場調査とか、販売実績とかというところに行って、それからまたその次のものの開発につながるわけです。

例の私がやりました座具、楽座椅子というものに関しては、最初は千葉工大のほうの人間工学的なデータパターンが幾つかありまして、それを基本にして私のほうで企画をして、それがこういう試作品になったわけです。さっきも言いました、普通はこれだけがデザインと言われるケースが多いのですけれども、これはあくまで一番最初の部分であって、これでうちのほうで試作をしました。この試作の後にメーカーが製品にしたのがこれです。ちょっと物が違いますね。それから最初の試作のほうでは肘までそれぞれがくっついていたんですけれども、実際に最終商品になったのは肘なしの部分で、全体も少しラフな状態で仕上がっているんですけれども、これで一応きちんと市場には出たわけです。商品になったのがここですね。

ただ、ここまでの間に10年間かかっています。10年間、何の動きもなかった状態ですね。一応こういう形で表に出た結果、これは実はその販売企業さんのほうが幾つかそのものについての反応をとってもらったデータを私のほうに送っていただいたのです。ただ、これは今、ある程度、幾つか分類・分析していますけれども、実際にメーカーさんが送ってくれたのは単なるハガキ。ハガキが100枚分とかね、そういう段階でしかないわけです。だから、それを単に読んだだけでは絶対にわからないです。一応、私のほうでそれぞれが真意でどういうことを言っているかみたいなことを全部確認して、それなりに分類をしてというデータがこれです。こういうところまで、その結果があつての傾向がこれでわかるわけです。これがわかれば今度は次の段階へ進めるわけです。今のデータ分析というのは上の2段の市場調査、販売実績というところですね。それを次の基礎研究・応用研究につなげる。ただ、具体的なデザイン開発自体はその次の段階では余り反応・発展はしていませんけれども、その辺のところですよ。

これは次の段階での基礎研究です。だからある程度、物が思ったより出て、それだけの販売意識がついたということで、私のほうの研究テーマをこれに絡めて、もう一回うちのセンターの研究費を使って、こういう研究段階で歩いています。これはやはり千葉工大の元々の人間のデータをつくってくれた所、そこをお願いをして幾つかこういう実験的なことをやりました。それと別に私のほうは私の意匠権の中で、例えばこれは体圧の測定データですけれども、いろいろな人にいろいろなクッションの、クッションの種類を幾つかつくってみて、それでどちらが座りやすいか、体圧分散がいいか悪いか、そういうようなバックデータを出していったものです。こういうのは売れた分のその種類とか、その固さとかの組み合わせによっても変わりますし、厚さによっても変わりますし、もう一つ、座る人の体形によってもかなりこの結果というのは変わってきます。特に細身の人の場合だと、どうしても集中的な座圧というのがかなりかかります。その辺のところを、これはうちの技術センターの中で私が中心になっていろいろ調査をやった部分ですけれども、こういうような幾つかの実験データを踏まえて具体的なものにしていきます。

だから、最初のものに比べれば、改良した部分というのは確かに形も色も変わっていますが、単に色や形、恰好だけで開発をやっているわけではなくて、実際は座り心地が違います。このクッションの中の構造が違います。だから最初のほうは割とペシャンと。だから再度、坐骨にかかる圧力はかなり高かった。これは今だから言えますけど、その頃、販売しているときはそんなこと絶対に言わないですけれども、そういう実験的なことをやって初めて分かって、それで中のクッション構造をどうすればいいとか、それから、この形状も勝手にこんなのがかっこいいとやったわけではなくて、後ろの取手の位置によってこういうふうな形状に変わってきたわけですね。

先ほどの一番最初の物が多分、10年近く、そんなにいかない7～8年かな。それでその後これに1回

変えて、これは1年か2年ぐらいで…。それから、こちらのほうに変わりました。この前の段階は2年ぐらいしか確かつくらなかったと思います。今度変わったのは、例えばこの足の部分ですね。足の部分を、スタッキングはできますけれども、ズレのないような構造に変えて、それからここで、この段階で肘のほうも取りつけるというようになりました。この張り地のほうも、その裏の構造を変えてこういうような形状となったわけです。今はこの段階で出ていますので、多分、皆さんのイメージはこれだと思いますけれども、その前に幾つか、そういうような段階があったのです。それが実際に販売のほうにつながって、これも余り詳しく公にはできないのですけれども、写真はちょっと控えてほしいのですけれども、これがカタログハウスさんの販売の実績なんです。それで、ここからここまで、これが1年ですね。例えばこれだったら2004年、これが2010年だと思います。1年間で一番最初に4月号に多分これが載ったんだと思います。載ったときはかなり販売数が多いんです。それからだんだん減っていく。そうしたら、この号に関してはずっと1年間続くわけですけれども、別の号で7月に出るんですね。そうしたら、そのときにここでかなり数が上がって、それがまただんだん減っていくと、こういうような半期ごとの繰り返しがあって、年間を通じてどれぐらい販売されたという、色の濃いほうがどうか、赤いほうが数が多いということで見てください。

今のものも、これは販売企業のほうからある程度データを分けてもらいましたので、こういうことができるわけです。ただこれも、さっきのものと一緒に販売企業さんにしても年がら年中、すべてこうやって分析した状態で来るわけではありません。単なる数字で来るだけです。だから、ああいうふうに自分のほうで再分析できるようにやってしまわないと、その実際の内情というのがわかるのです。それから、これもさっきと同じように、実際にそれを使っている人から販売企業さんのほうに届いたお礼であったり文句であったり、そういう部分の私とその最中に整理した内容のものです。だから、こういう形で経過と結果というのが出てきます。

それで、今で終わりではなくて、またその後、さっきのものは楽座椅子そのものの改良です。それも2回、3回行われているわけですけれども、それとは別にメーカー側としては、その楽座椅子だけではなくて、もっとほかの関連品のものも向こうのほうには提案をしているわけです。それがまた引き続きこの基礎研究から製品開発のところまでいっています。これに関してはまだ具体的に実際は商品として表には立っていないところなので、いわゆる販売企業と私とかメーカーとのやり取りの段階ではあるのですけれども。ちょっとずれますけれども、これは例えば、そのものが強度が大丈夫かどうか、どうすれば強度が強くなるかというようなところで、これはメーカーさんとうちのほうとでやっている共同試験をやっているところなんですけれども、うちは工業技術センターで、共同試験の担当は私ではないのですけれども、同じうちのメンバーのほうがやってくれています。だから私も今まで見ながら、こういうのをやっているところを見ながらやっていくことができました。

それから、例の楽座椅子はその背もたれつきの分なんですけれども、背もたれなしでこういう正座に適したような椅子、こういったものもつくっています。これは正座にと言いましたけれども、別に同じようにこれであぐらがかけます。背もたれがないというだけなのです。

それから、これはちょっと位置の関係でわかりにくいと思いますが、手前が一般で市販されている楽座椅子です。奥のほうが、こちらのほうから提案したM・Sサイズ。要は、これだと、どちらかというと比較的、体格の大きな男性用。女性、特におばあちゃんあたりだと、これだと大きすぎるということです。大きすぎるというのは、例えばこの座面の奥行、ほかはある程度、調整できるのですけれども、どうしても座面の奥行というのはこれだと大きすぎるか深すぎるかですよ。そういう人たちのためにもう一回り小さなもの、靴だったら、それこそ1センチとか5ミリ刻みでいっぱいいろいろなサイズの

ものがありますけれども、本当はそういう対応までできれば一番いいんですが、残念ながら家具の場合は製造の関係でそこまではできません。ただ、少なくとも今まで使っているLサイズに対してM・Sの人が座れるようなサイズというのはどうですかという話で、そのメーカーとも話をし提案をした内容です。

これはまた人間生活工学研究センターさんのデータを私のほうが分類・分析し直した部分なんですけれども、いろいろお世話になっております。一応、個々のデータをこういうふうにして私のほうでこれらを分析したデータなんですけれども、例えばですね、1番目が70代の女性、その次が70代の男性、その次が30代の女性、その下が30代の男性。実は50代のほうもデータはいただいたのですが、実はこの70代の男性と30代の女性が、例えば座面の高さとか、肘立ての高さ、そういうのが比較的近い数字なんです。だから、こちらのほうに平均値を出していますけれども、真ん中の2つを1つのブロックにまとめていますというのは、比較的数値が近い。だから、今30代の男性をLサイズとするならば、30代の女性や、それから70代の男性、この2つがMサイズ。70代の女性になると体格が小さくなりますので、例えばこれを1段階として、そして3段階まで本当はつくりたいですね。ただ、なかなか家具のほうは、そういうサイズ別というのはつくってくれませんので、せめてもう1タイプ、小型のタイプというのを何とかつくりませんかということで、とりあえずメーカーさんのほうはある程度納得はしてくれましたけれども、販売のほうには今、残念ながら現状ではまだつながっていません。

それから椅子だけではなくて、その椅子で使う机、その楽座椅子で使いやすい机というのも提案しました。物にはなっていませんけれども。

通常だったら試作したもので、ないしは1回市場に出て、それが売れなくなったらそれでおしまいというようなケースが比較的、我々公設試の場合はそのままデザインというものを渡してしまって、それでメーカーが使って売れなくなったらそれでおしまいというような形になってしまうケースが多いと思うのです。これは、私のほうが最初の研究をやっていたから実際にそのメーカーの中まで入って、それからその販売する事業の中まで入っていくことができたというところからいくと確かにあるのですけれども、実際、やはりそこまで入り込んで、ある程度、何回転かしていかないと、実際に満足のいくものというか、細かい問題点は幾らでも探せば出てくるのです。それをさらに改良して新しいものにしていくという形をこの場合はとれたのですけれども、なるべく皆さんのほうも、そういう開発に関しては必ずそういう何回転もしていけるような開発の仕方というのをやっていただければと思います。それをお願いしたくて、一応こういう発表をやらせてもらいました。以上です。

#### ●座長 宮田 なつき（産業技術総合研究所）

ありがとうございました。まず、ご質問等がある方、お願いします。先ほどの研究交流会のほうで地域デザイン研究会でしたか、結局、売るところまで総合的にマネジメントしましょうみたいな、普段からやらないとだめだよねというような話をされていたかと思うのですけれども、多分、結局こういうことも必要になってきているのだと思うのですけれども、そういう立場から、もっとこうしたらいいのではないか、もっとこうするとうまくいくよみたいなコメントがあったりしないですかね。個人的には何回か踏み込めたのがちょっと羨ましいです。私もさっきの自己紹介のときにちらっとお見せしたマウスの開発をやっていたのですけれども、あのときは結局、1ループ分しか携わらせてもらえなかったもので、でき上がったものを再確認したときのことを言えば、「あーっ」というのがちょっとあたりなんかして、2週目があつたらもっといい物がつくれたかもしれないと思うのですけれども、ちょっとそういったのは羨ましいですね。どうでしょう、何かコメントはご



ざいせんか。

●小堀 誠（神奈川県産業技術センター）

補助金事業とかいろいろ県の研究テーマとかありますが、昔は大体3年ぐらいが目途だったんですが、最近は1年で精度を上げてみたいなのが多いですよ。それでよくいろいろな支援を中小企業さんとしているのだけれども、その支援期間が終わっちゃうと、「後は自分たちでやってね」みたなところで、そこで実際、実にならないというケースが山ほどあると思うのです。ですから、その技術移転の仕方ですよね。その辺でどういうフォローアップをしていくかというのが非常に重要だと思うので、その単年度で成果を出せと言う上司をどういうふうに説得するかというのは非常に大事だと思うのですが、多分、予算もついて1年、2年はできるのですけれども、その後のやり方はそれぞれ地方の公設試なりのご苦労とかやり方でやっていると思いますので、非常にいい例ではないかと思います。大変でしょうけれども、頑張ってください。

●中瀬 博幸（徳島県立工業技術センター 生活科学科長・専門研究員）

今の単年度事業で、ある程度の試作、具体的な物ができれば、そこから先はどうしてもメーカーさんが主体になって動いてもらわなければいけないので、メーカーの動き次第で、しかもある程度時間がかかりますので、その後はいわゆる公設試の立場で協力できるところをメーカーと一緒に進んでいくという形はとれるかと思うのですけれども。実際に成功する確率というのはそんなに高くはないのですけれども、でも、それをやらなければ絶対にそれから先には進みませんので、そのあたりをよくとらえて進めていただければと思います。

●山永 滋（特許庁 総務部 普及支援課）

すみません、せっかくの機会ですのでお聞きしたいのですけれども。先ほどデザインを企業にすべて渡してしまったということをおっしゃっていたのですけれども、例えば権利関係とか、意匠出願とか、通常、センターさんと企業の間では、ほぼ企業が持つというのが当然なのでしょうか。それとも出願する、しないというのもあったり、ケース・バイ・ケースだとは思いますが、この場合はどうされたのか可能な範囲で教えていただければ。

●中瀬 博幸（徳島県立工業技術センター 生活科学科長・専門研究員）

デザイン権というのは、取ってもちょっと変わったものであれば結局その規制ができないケースがとて多いのです。だから、デザイン権自体はありますけれども、少なくとも知らない地方の場合は、余りそのウエイトを置いていません。今度、特許を見ますと、これはこれでちゃんと規制はあると思いますが、本来は何か技術的な新しいものがあれば、確かに特許は取れるのです。ただ、こういう座り方が違うというだけでは特許にはならないということで、私のほうは伺いました。だから…。

●山永 滋（特許庁 総務部 普及支援課）

足の形が変わっていったじゃないですか、そういう形とか結構、特徴的だったのかなと思うのですが、そこだけ取るとかということは…。

●中瀬 博幸（徳島県立工業技術センター 生活科学科長・専門研究員）

その当時聞いたときは、余りこれでは特許は取れないよという話でした。あと、デザイン料というか、企業がデザイン権をとる場合は、通常は企業から設計依頼、だから、設計手数料ですよ。実際の本当のデザイン料というような大きな金額は絶対には取れないので、あくまで公設試の場合はデザイン手数料。それで、こういう設計をやってくれということで申請を出してもらって。だから、最初の試作まではうちの経費でつくったのです。それを当社が製品にしたい、商品にしたいという場合は、その時点で依頼書をもう一度出してもらって、そのときに依頼書に設計手数料というのをちゃんとつけてもらう。



それでうちのほうで（私のほうが）以前に書いた図面を例えばそのまま渡すか、場合によってはそれを多少手直しをして、その企業に合う状態で回答として出すというような形をとります。企業さんとしては一応手数料を出して、その依頼書等を出してもらうので、それで一応形は取れると思います。当然、ほかの企業さんからもそのソフトをすぐ出せるわけですから、企業が違えば、やはり扱っている材料とか技術とか設備とか全部違うので、結果的には違う形になって現れるのは当然ですよ。そのあたりはうちのほうで依頼に対しての設計をやります。

●山永 滋（特許庁 総務部 普及支援課）

この場合の手数料というのは、公設試の設計に対する手数料ということですか。

●中瀬 博幸（徳島県立工業技術センター 生活科学科長・専門研究員）

そうです。だから、私は絶対デザイン料とは言いません。デザイン手数料と言います。本当のデザイン料はとてもじゃないけれどもくれませんから。

●座長 宮田 なつき（産業技術総合研究所）

いろいろな考え方、ありがとうございました。時間が押しておりますので、次の発表に移りたいと思います。

（拍手）

続きまして、こども目線・こどもゴコロによるデザイン発想法のためのツール開発ということで、大阪府産業デザインセンターの川本さん、よろしくお願いします。

**3) こども目線・こどもゴコロによるデザイン発想法のためのツール開発**

●川本誓文（大阪府産業デザインセンター 主任研究員）

皆さん、こんにちは。大阪府産業デザインセンターの川本と申します。よろしくお願いします。亘保さんとは親しいお友達の間柄で、facebookなどでもいろいろやり取りをしている仲間なんですけれども、研究発表会するよということで、気軽に手を挙げてしまいまして、ふたを開けると3件ということで、貴重な時間をとっていただいて恐縮です。お疲れのところ、今しばらくおつき合ください。



手元の資料の中に1枚だけクリアデザインカード、デザイン発想法の開発という資料を入れさせていただきますのでご覧ください。ちょっと前置きですけれども、私ども大阪府は、皆さんの県の事情とは若干状況が異なりまして、ほとんど行政機関、ほとんどというか全く行政機関です。その中で中小企業のデザイン振興をしているんですけれども、デザイン相談からいろいろなセミナー、ワークショップの企画等をやっております、その中でも細々と研究というのを続けています。状況はオフィスと会議室があるという空間で、工房もなければ機器もなく、スタッフもいなくて、私が最後の研究員なんですけれども、そういう状況の中でも研究をベースに何か事業おこしをしていきたいという研究者の本分として、いろいろエコデザインからユニバーサルデザインから、最近のキッズデザインという流れで進んできているのです。基本的には基礎研究で何か開発手法みたいなものを生み出していこうという流れになってきておりまして、それが大阪府のスタイルになってきているのです。

そういう中でキッズデザインというのをとらえたときに、いわゆるキッズデザインというのをキーコンセプトにして、デザインの発想を生み出していこうということになっています。だから、キッズデザインというので、子供のためのものという間違っただけの思い込みを持っていらっしやる方もいらっしやるのですが、子供が使うものは、もちろん自分らの子供のものもあるのですが、公共空間の中

では子供たちがその環境にさらされるということで、広く万人が使うものの中で子供が使うものもあるわけです。子供の発想を使って、こういう開発手法を生み出していこうという流れの研究なのです。

こどもOS研究会というのを実はつくっております。これは、大阪府は予算を出しておりません。内閣府が認証したNPO法人キッズデザイン協議会というのでできているのですけれども、その調査研究部会として立ち上がっております、うちと積水ハウスというのがリーダーでやっているのです。唯一関西で立ち上がっている研究会なんですけれども、ここで定期的に会議を持ってやっております。実際にワークショップとか調査とかをしているのですけれども、お金はキッズ協からもらっていて、基本10万円から30万円ぐらいの範囲内で毎年もらっていて、それを活動費用にしているのですけれども、最終的にはその費用はこういう冊子になったりですね、こういうデザイン発想カードになったりしております。これをつくるための費用にほとんど使っているということなのです。ほかにも積水ハウス以外に大和ハウスさん、呉越同舟ですけどパナソニックさん、ジャクエツさんという住環境メーカーですね、そこが主に入って、そこの中の設計士とかですね、プロダクトデザイナーとか、そういう方々が入って研究をしております。

キッズデザイン賞というのが毎年あるのですけれども、そこにエントリーすることも実は認められていて、第2回で受賞して、コミュニケーションデザイン部門で受賞して、第4回で大臣賞をいただいたというものであります。

やっているのは何かと言うとですね、今日はたまたま産総研の研究者の方もいらっやっていますけれども、わかりやすくこうやって対比して図を出しますと、いわゆる上流から下流までという研究のアプローチがあると思うのですけれども、産総研さんなどがされているのは、この下流のほうでどうフィードバックしていくかというアプローチだと思っております。事故があったらその原因究明をして問題を解決していく。我々のデザイン、アウトソーシングとしてやっているのはもっと上流ですね。

まず子供がどんな振る舞いをするのかというのを観察して、その集合値みたいなものを取り出して、それを皆さんにわかりやすいように言語化する。それをランゲージと言っていますけれども、そういう場合に変換して、そこにデザインなどが考えやすい幾つかの文字情報、デザインコードみたいなものを付与して、それをパッケージにして、これを発想ツールにしていくという流れです。それをどう生かしていくかという、実は2つの方向性がある、子供たちがこういう行為をするので、これが危ないから未然にハザードをなくしていきましょうという安全・安心のためのアプローチ。これもキッズデザイン協議会では3本柱にいつも理念があって、安全・安心のためのデザインとかですね、知育・想育、子供の想像性教育を伸ばしていくようなものとか、あるいは子供を産み育てやすい環境をつくるという3つの柱があるのですけれども、それに沿ったものになっています。

もう一つは、これは我々独自のアプローチなのですが、そういう子供たちの豊かな創造性をデザイナーも実は使っているのですけれども、それを可視化することによって、それをいろいろな人に使ってもらえるようなアプローチをしていこうということで、これは感性化商品という言い方につながるのですけれども、遊び心のあるデザインのイノベーションを起こしていこうという動き。この2つの目標というのがあるのです。

今、我々が提起しているこどもOSというのは、小学校ぐらいまでの子供たちがよくやる遊びの中の行為なのです。それは家の中でも外でもあるのですけれども、そこである程度の共通性などが見出されます。それらを抽出してまとめ上げていくのですけれども、子供たちが何で物事に没頭するかとか、遊ぶかというのは、比較的到我々は素人なのでわかりませんが、ある意味、成長発達のための1つの手段なのではないかと思っておりますし、こういういろいろな探究心、想像力、好奇心、触感力など

を鍛えていく、経験をふやしていくためのアプローチなのではないかと思っております。そういうものから、このOSという名前をつけていきました。実際にはこういう他愛のない子供たちの行為ですね。いわゆる行動とか思考みたいなものを「こどもOS」と言っています。

我々も昔はこんなことをよくやっていたと思うのですが、実際に小学校を舞台にしたワークショップをしつらえて、子供たちの行為を抽出するような仕組みをつくって、何回かこういうワークショップをやりました。そこから出てきた、ランゲージ化したものが、例えばこういう狭い路地を通り抜けていくのが子供は好きですよと、子供は小さい感覚の中で、このぐらいの幅のところを抜けるというのが好きだというのが出てきたら、こういうランゲージをつくるわけです。最終的に21のランゲージまで出てきたのですが、これはやはり帰納法的でして、実際はもっとあるかもしれないのですが、我々が調べた範囲の中で21ありましたよということなのです。

デザイン構造というのがここに出ていまして、子供の肩幅プラス $\alpha$ の隙間とかですね、遮へい感とか、通り抜けできるとか、先が見えないような構造になっているとか、そういうデザインの中で触発されるようなキーワードを付加していきます。そのときに子供がどういう思考、精神反応の状態を持っているかというのを言葉に表したら「共鳴」とか「感知」とか「思い」という言葉です。これは限定ではなくて、ある状況のときにこういう言葉が組み合わさるだろうというものです。これによるカードを幾つか、カードというか、冊子の中でこういう見せ方をしました。これで一度賞をいただいたのですが、こういう狭い所が好きというようなところがあります。これをデザインに生かしたら、いわゆるオープンスクールというような壁のない大空間の小学校の中で、こういう囲まれた空間をわざわざつくるというのは、どうしてもあるわけです。そういうものに実は生かされている。タイルの同じ色のところだけ飛んで歩くような遊びの行為。大人は子供がうろちょろしているから邪魔なんですけど、子供にとってはこう進みたいというのがあります。こういうバランスがとりにくいところで、あえてバランスをとろうとするとかですね、何か子供の感覚で神様を信じたり頼っているというところがあったりする。

幾つか出てきて、行為というところでアプローチすると必ず突き当たるのは、実はアフォーダンスという考え方なのです。ジェームズ・ギブソンという人が提唱した、与えるということで、環境に慣れない人の行為の可能性ということで、あらゆる行為の可能性が、もともと環境に内在しているのだという考え方で、それをデザインに持ってきたのはドナルド・ノーマンという人ですね。ノーマンは知覚的アフォーダンスという言い方をして、要はユーザーインターフェースの部分で、操作の中で、こうやって使っていったらうまく誘導できるよ、ドアのノブは何かあったら回すし、痛かったら押すようにできているんだよというような言い方をして、知覚的アフォーダンスと言っていたのですが、人はアフォーダンスとこれがややこしくて、ギブソニヤって、ギブソンの信俵者がいるのですが、その人からややこしいよということになって、最近はシグニファイアという言い方に変えてきているみたいだ。さっき言ったこどもOSは、どっちかという我々はもちろんアフォーダンスのほうだと思っているのです。子供は、「こうやってください」と言ったって、言われたとおりにやらないし、あまのじゃくで、いろいろなケースの考え方をすると、遊びの中でふざけもするというので、アフォーダンス的に考えないと、子供の動きはだれも予測できなくて危ないよということになってくるのです。ではアフォーダンスを考えると、やはり動き、動作なので、やはり動詞で、複合動詞で考えていくことがいいだろうということで、動詞をあぶり出して、先ほど考えたランゲージに当てはまりそうな動詞をこうやって並べたりして、この動詞の行為が実際できるかどうかということで、例えば後々検証するみたいなことができるのではないかと思っております。もう一つ、先ほど言ったこどもOSキーワードですけど、実は9つあるのです。これは遊びの研究をしたカイヨワという学者と、フローという物事に没頭すると

いう研究をしているチクセントミハイという人たちの理論と合せて共通部分をあぶり出すと、実はこの9つのキーワードになりまして、精神的な部分はこれで説明できるかなと思っています。

こういったものをこの本で解説しているのですけれども、この本だけでは発想ツールにはならないので、こういうカードにしております。これがそのカードなのですけれども、これはですね、裏表になっていまして、先ほどの写真で示していたものは実は白いほう、こういうことが楽しいですよ、こういう環境をつくりましょうと言っているのがこの白いほう。いわゆるポジティブな発想。でも、そう言っても危ない所があるんですよというのが黒い所。その表裏で考えてみましょうというのがこのカードの使い方です。ほかにもこういうぐあいにつくっております。安全・安心構造ということで、危ない物よりわかりやすいように、こうやって言葉として表しています。こうやってつくっていきまして、これをどうやって使うのだというところで今、考えているのが、こういうシートを用意しまして、これはクロスランゲージシートという名前をつけているのですけれども、真ん中に何か開発したい物を置く。それがテーマですね。そのときに、ここにカードは4つに自由に並べてもらうということです。並べてもらって、これがテーマですから、ここに例えば「見立て」とか、「ピッタリ」とか「揺れる」とかですね、もぐらせるという言葉から触発される言葉とかですね、何か形とかですね、それはデザイナーがお得意なので、いわゆる言葉と言葉のさっきの連想ですね。この連想を導きだしやすくするためのこれは触媒だと思っています。だから、何かデザインなどをするとときに触媒があると、あるいは条件がつけられると考えやすくなるというのと一緒に、こういうものを入れかえて、ここから発想されるものを出していこうということで、これは例えば「テーブル」ということで私が考えた中でこれぐらいは出てくる。カードを入れかえればもっと出てくるだろうというところを発想につなげていこうということです。最終的には、やはりリスクというのはある程度共有しないと、子供が発達しませんので、リスクは共用して遊び心を生かした楽しい商品を考えていこうというのが狙いです。

先ほどのユニバーサルデザイン研究会のほうに参加させていただいたのですが、これがユニバーサルデザインの範疇なのかどうかというのはまだ、そういう議論にもなっていないところでして、いわゆるキッズデザインがどこに入るかというのはまだ誰も探っていないと思うのですが、私はこのあたりにその可能性があるのではないかと。非常に荒っぽい図で専門家の方にお叱りを受けるかもしれませんが、このオブスタクルという概念は、実はかの障害物があって、それを乗り越える、乗り越えられる障害物ということでオブスタクルという意味あいがあるのですけれども、元気な子供にとってはこういう環境というのが大事だということです。

例えばこういう石垣、登りたい子供がいれば安全に登らせてあげるように、手がかり足がかりをわざとつくるというのも大事なかなと思います。ただ、途中でおっこちゃうと危ないので、例えばこういうものでも絵柄的に考えると多様性を持たせるというのが大事かなと思っています。これは沖縄で発表があるので用意したのですけれども、下のほうに勝連城という城跡があるようで、非常にぴったりの素材があったので持ってきたのですけれども、ここを登るのは危ないですよ、だからつるつるにしてやる。登れないところですね。体力のない方は、ここにスロープがあって、こっちを行きましょう。でも、冒険心のある子供はここから登ったり、お姉ちゃんならここから登ったり、小さい子供なら、ここに足がかりがあるので、こう行ってこう行って登ったりとか、要は多様性がある環境が大事なんだよということを提唱していきたいという、これは環境デザインの1つの例ですけれども。これが結論というか、最後のメッセージです。ありがとうございました。

(拍手)

●座長 宮田 なつき（産業技術総合研究所）

では、少し時間がありますので質問やコメント等がありましたらお願いします。

●岡村成将（千葉県産業支援技術研究所）

面白いなと思ったのですが、公共遊具のメーカーなどにOSの発想、普通の子供のそういう勝手な活動は一般のところでは危ないので、やはりそういう所で生かせるという形でしょうか。

●川本誓文（大阪府産業デザインセンター 主任研究員）

そうですね、今メンバーになっていますジャクエツさんという幼稚園とか保育園の遊具とかを開発しているところもメンバーですので、こういう発想を取り入れて開発に進んでいただいていますし、今、同じくメンバーの積水ハウスさんでは実際の事例として、ちょっと鎖で見えないと思いますけど、グラウンドメゾンの前というマンションですね。マンションの共用部、中に緑地帯があるのですが、そういうところで、わざと子供なこういう小道を設けたり、小川を飛び越えられるような仕組みをつくったりとか、実際、事例は、このぐらい程度はちょこちょこやっているということです。だから、これはこれから広めて使っていただきたいというのが我々の願いで、こちらでもそのカードを使ってデザイン発想をしてみたいなという方がいらっしゃれば提供したいなと。結果どうだったかというのは返していただくとありがたいのですが、

●岡村成将（千葉県産業支援技術研究所）

OSになったものは子供が積極的にやる。つまりそういった意味で楽しいプラスの効果を生んでいるものも推薦したということでもよろしいのでしょうか。

●川本誓文（大阪府産業デザインセンター 主任研究員）

行為の中には楽しいという部分もリスクも裏表で必ずあるのですが、だから、その部分はいかなる行為についてもあるだろうというふうに考えています。

●岡村成将（千葉県産業支援技術研究所）

わかりました。

●座長 宮田 なつき（産業技術総合研究所）

ほかいかがでしょうか。

●野上雅彦（滋賀県工業技術総合センター）

非常に面白い発表、ありがとうございました。

子供ランゲージということですが、こういったものは大人も全く同じように感じて思うことだと思うので、ぜひ商品開発に使っていきなさいなと思っているのですが、今、希望すれば送っていただけるということだったので、ぜひお願いしたいなと思います。

●川本誓文（大阪府産業デザインセンター 主任研究員）

ありがとうございます。今年の下半期には、我々のほうでもこれをツールにしたデザイン発想練習みたいなワークショップを企画したいと思っています。よろしくをお願いします。

●座長 宮田 なつき（産業技術総合研究所）

ほかいかがでしょうか。そろそろ時間なので、最後に行かせていただきます。ありがとうございました。

（拍手）

最後の発表は『ちば戦略的デザイン活用塾』の取り組みということで、千葉県産業支援技術研究所の岡村様、よろしくをお願いします。

#### 4) 『ちば戦略的デザイン活用塾』の取組

##### ●岡村成将（千葉県産業支援技術研究所 生産技術室 主任上席研究員）

今回はこのような場を持っていただき、ありがとうございました。それでは『ちば戦略的デザイン活用塾』の取組について、発表させていただきます。

この事業が始まったのは県の商工労働部の事業なので、経産省の方がいらっしやっているのですけれども、戦略的デザインという言葉はそういう意味で引用させていただいたのかなと思っています。私がつけた名前ではないんです。事業は商工労働部産業振興課で始まりまして、大きく分けて無料セミナー、有料セミナー、コンサルティングプログラム。これは短期の専門関係なのですが、その3本立てのプログラムになっておりまして、平成19年度から始めております。県内のデザイン系大学にもご協力を受けております。



この経緯なのですが、そもそも意匠権の登録が非常に少ないということで、被害の不安とか、何か商工労働部のほうであったみたいで、それでデザインに関する塾をやろうということになりまして、意匠権に関する啓蒙もしなきゃいけないし、どんどん活用してもらわなければいけないということで始まった事業です。

最初は行政から始めましたので、有名なデザイナーを呼んで大手の企業のやり方を真似したらいいのではないかみたいなことで始まったのですが、なかなか行政の方も情報が不足しているので、身近な県内大学の先生と一緒にやろうということになりました。このとき私はオブザーバー的にちょっと横にいただけなのですが、そういった中で平成20年度に千葉工業大学のほうで先生にお任せして、お金を全部投げて始めたのですが、なかなか中小企業さんのアンケートを見るとですね、内容がちょっと大学の内容と離れていて、なかなか身近に感じられなくて導入するのがなかなかというアンケート結果もありましたので、平成21年度から県のほうで独自にいろいろなデザイン専門家にご協力をいただいてプログラムをつくってきました。これが非常に好評になりまして、平成22年度に多彩なプログラム、経営戦略からネーミング、色彩、パッケージ、人間工学…等々、デザインの中からのいろいろなものを網羅してやってみようということになって実施しました。

平成23年度はこういうことをやったのですが、なかなか中小企業はこういったことを全部理解して自分の会社に取り入れるということはなかなか難しいのではないかとということになりまして、それでそういったハードを一つ一つつぶしていくということよりは、もっと総合的なデザインに対する考え方とか導入の仕方をやろうということで、ちょっと新しい切り口とか、いわゆるデザイン系専門家でない人も入れてやっております。

今年度はちょっとそれを検証しながら技術と物づくりとデザイン、トータルデザイン。ホンダさん、あと町工場デザイン導入事例ということで、墨田区さんの事例を取り上げてセミナーとかを開催しようかなと思っております。

先ほどの3つの理由は上から逆三角形になっていますけれども、啓蒙で幅広くデザインに関して、知識と関心を持ってもらって、講座では社内にいるデザインに精通する企画をしている社員に対してデザイナーとのコラボレーションの仕方とか、いわゆる社内の企画立案に対して実行に役立ててもらおうという企画で、さらにそこから実際に課題を抱えた企業に関しては、デザイナーを3日間無料で派遣しまして、足がかりとか導入を支援するという、これを積極的に首都圏などでは活用している企業がいっぱいあるのですが、デザインに縁が遠い企業に関しましては、デザイナーと仕事をするということは非常にハードルが高いものですから、3回の無料相談ですね、その垣根をとろうという後押しをしています。

これまで3年間ですが、無料セミナーはその時々のできごとなどを反映してセミナー講座をしております。昨年度は震災ということがありましたので、特に注目されました新エネルギーですね。それに関してのテーマを行いました。その前は経営戦略、その前は地域ブランドコミュニティ。有料セミナーのほうは、昨年度はいわゆるデザイン専門家ではなくて、考え方のデザインということで丸の内朝大学とかで講演されている方とか、メディア系の人に講演をしていただきました。その前は割と総合的なプログラムを組みました。コンサルティングプログラムは3日間の派遣なんですけれども、その後、専門家とうまくいけばデザインに発展するというので、菓子協同組合が8社あるのですが、それが八犬伝まんじゅうというのをつくったりとか、福祉機器の会社が初めてデザインに取り組んだとか、あと産業機器をつくっているメーカーもGUIのデザインを千葉大学さんと研究した事例などもあります。

千葉県の特徴なのですが、余りよくわからないと思うのですが、いわゆる産地というのが余りなくてですね、特定産業の集積地がなくて、業種や規模がさまざまということで、最近、実行している企業はB to Cの食品製造業とか、B to Bのものづくり企業で、CE思考の企業が主です。そのほかグッドデザインをとっている企業が余り行政に期待していないという。これは2008年のアンケートなのですが、63%が製造業なのですが、業種は様々です。そのほかIT企業などもあります。

受講企業の現状ですが、デザイナーがいる企業が11%で関連部署が兼務しているところが18%、経営者がやっているところもありまして17%、外注は13%、複合形態が37%となっています。傾向なのですが、割りと自分ところの企業、技術に自信があってもものづくりをする企業が多いので自信はあるのですが、やはりマーケティングとか、その辺にかけるコスト、人材とかが圧倒的に不足しておりまして、そういう意味でプランニングがなかなか厳しいということです。グラフィック、プロダクトとやはり何かあるのですが、それ以前のソフト面、企画コンセプトというか、考え方というのでしょうか、その辺がおろそかになっている場合が多いです。

あと、過去にデザイナーと仕事をした企業もたくさんあるのですが、そのときはお金を使って、今のデザインまあまあだからいいやということで、リニューアルというか、皆さんご存じのブルガリアヨーグルトのパッケージなんかを微妙にわからないように変えているのですけれども、そういうリニューアルをなかなか中小企業はできない。大企業はいわゆるお金がありますので、社内にデザインの部署もありますし、販促に関しては広告代理店を通していろいろなデザイナーを決めてコンペをかけて、いろいろなツールがいっぱいありまして、調整能力に長けているのですが、中小企業の場合は地産地消みたいな感じで地元のデザイナーと仲良く仕事する場合が一番多いと思うのですけれども、それ以外に何か新しく探そうとすると、いわゆるデザインバンクとかデザイナーバンクとか雑誌とかを見ても、なかなか実際にその人と会わないとですね、なかなか自分と合うデザイナーを探すのは非常に難しいのではないかとというのが今までやってきた感想です。

これは企画から販売までという簡単に図式しましたがけれども、平成22年度にいろいろなプログラムを用意したときに、いろいろな先生をこの枠の中に入れていったのですが、プランナーとかブランディング、ネーミングの専門家、あと工業デザイン、大学の研究室、グラフィックデザイナー、メディア仕掛け人というふうになって、点々で囲っているB to Bのところは割と参加企業が多いのですが、あとインダストリアルデザインにちょっと掛かっているというイメージで、もうちょっと上流のほうのブランディングだと、もうちょっとインダストリアルデザインまではいっていない状況です。大学に関しては研究なので、少しそこからまた離れてしまう。そしてB to Bの人は売るときは人任せというか、グラフィックデザイナーとか代理店とかに頼んでしまっ、そこら辺のラインも下がらない。あと、今も問題になっているというか最近の流れですが、やはり売れることが大事だなということの流れになってい

まして、それはなぜかと言うと、経営者がデザインを導入するときに、これって売れるのかということがすごく気になるので、その辺をすごく説得しなきゃいけないのですが、必ず売れる方程式というのはないのですが、最近いろいろ成功している人、仕掛け人とかバイヤー、こういう人たちが時代の空気をよく読んでいて、ある意味でデザイナーよりもこういう人たちのほうが、売れるということに関してはいいと思います。

昨年度はちょっと震災関係でスマートエネルギーに関してのセミナーと展示会を産学官で共同で行いました。そのほか、いわゆるデザイナーではない、考え方のデザインということで、コンセプトデザインの薦めという事業をしました。昨年度の内訳ですけれども、製造業が多いのですがサービス業の方も多く聞いておりました、2008年度よりもかなり製造業からほかの業種に、あるいは自治体の方も来ていたのですが、広がっています。従業員に関しては中小企業だと10人から49人のゾーンが25%。業務は経営管理の方。これはやはり考え方のデザインということで、いわゆるデザインセミナー、本格的なデザインセミナーだと、そういう人はなかなかとつきにくいのですが、こういった方にアピールできたのかなと思っています。

昨年度の講座の満足度ですが、毎回アンケートをとっているのですが、スマートエネルギーに関しては72%に対して、その次の考え方のデザイン、この方が丸の内朝大学の古田さんという方なのですが、2つ合せると96%満足で、活用度も90%ぐらい活用できています。非常に私も聞いて楽しかったのですが、すぐに何かに気付くとか、発想に役立ちますというような話だったので、本当にものづくりでデザインをこつこつやるという話ではないのですが、そういった意味では非常に受けが良かったということです。

最近はデザインということを産業振興に絡んで、産業振興にならなければいけないということで、売り上げるいろいろなデザインというのを売れる一つのツールとして、もののデザインからネーミング、コピー、媒体の活用方法とかを総合的に考えていろいろな情報を提起していこうという流れになっております。そのための専門家と連携してということになっています。

今年から来年度にかけての方向性なんですけれども、ビックサイトとかいろいろな展示会に行きますと、食品でもインテリアグッズとか、ものづくりでも、デザインがよくて当たり前の世界になっていまして、そうすると食すとかそういう展示会もあって、何か心に響くとか訴求力があるとか、あるいはバイヤーがいてくれて非常にプロデュースがうまいとか、値段とか、品質のバランスがとれている。このあたりが整っていないと、幾らデザインがよくても売れないということになるかなと思っています。

最後に、これは専門家がよく言うのですが、結局、自社企業の設計者の意欲がないとうまくいかないということを言っています。これはなぜかと言うと、幾ら企画を社内の方が理解していても、経営者がかなりそこに力を入れないと先に進まないし、売れるところまで届かない。そして、その経営者とうまくパートナーを結べる専門家をどう選んでマッチングさせるかというのが、私たちもそうだし、いろいろな方の課題ではないかなと思っています。

結局、中小企業の意欲とか、いろいろなものにかかってくるので、どこをどうということよりは、行政とか、自治体としては場をつくる。場をつくるといっても、ただ場を設けるだけではなくて、より有効的に場をつくる。これは非常に抽象的で申しわけないのですが、それはその場の企業とか専門家とかいろいろな間に立ってですね。担当者が感じるものが変わってくると思いました。以上で終わります。

(拍手)



●座長 宮田 なつき（産業技術総合研究所）

では、何か質問やコメント等はないでしょうか。続きは交流会でということで、どうもありがとうございました。もう一度、拍手をお願いします。

（拍 手）

●デザイン分科会会長 榊谷 幹雄（三重県工業研究所）

どうも皆さん、ありがとうございました。始まりのときには大変失礼いたしました。それでは今日の日程はこれですべて終了にしたいと思います。

●司会 亘保 秀一（沖縄県工業技術センター）

今日、1日目の本会議、皆さんの協力のもと、少々時間は押したのですが、いい時間かなと。内容もすごく盛りだくさんで、すごく詰め込んでしまったのですが、会議のほうはこちらで終了ということで。



翌日（2日目）は見学会のほうがありますので、沖縄県庁の真向かいのほう、交差点の角地になるのですが、県民広場という広場がありますので、そちらのほうに朝8時半集合ということになります。8時45分にはバスが出発しますので、8時半までには集まれるようにということでよろしく願います。

では、皆さんどうもお疲れさまでした。ありがとうございました。

（拍 手）

## 6. 閉 会